

五感に触れる建築

— ル・コルビュジエから前川國男へ引き継がれた思想の遺伝子 —

2023年10月9日（月・祝）13:30～16:30 埼玉会館 大ホール

第3回フォーラム まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす
第10回 前川國男建築セミナー

五感に触れる建築

— ル・コルビュジエから前川國男へ引き継がれた思想の遺伝子 —

世界遺産となった国立西洋美術館の設計者で、20世紀の建築に大きな影響を与えた建築家ル・コルビュジエが自ら設計し、終の棲家となったのが、南フランスにある「カップ・マルタンの休暇小屋」です。2010年から2012年にかけて、ものづくり大学の学生と教職員とのチームがそれを現地で実測し、行田市のキャンパス内に精巧に再現しました。その過程をまとめ考察した本「図解 世界遺産 ル・コルビュジエの小屋ができるまで」が、この春に出版され注目を集めています。

今回は、著者である藤原成曉氏・八代克彦氏から、一連の作業から見てきたル・コルビュジエの思想についてお話を伺います。さらに、彼の弟子である前川國男まで流れているものについて、前川事務所の高橋功氏に語っていただき、埼玉会館を基点に浦和のまちへも議論を広げていければと思います。

2023年
10月9日(月祝)
13:30～16:30 (開場13:00)
埼玉会館 大ホール

聴講無料 (要事前申込・定員300名)

主催：さいたま国際芸術祭実行委員会
(公財)埼玉芸術文化振興財団
協力：ものづくり大学

● 講演
藤原成曉
ものづくり大学名誉教授
八代克彦
ものづくり大学名誉教授
橋本功
(株)前川建築設計事務所
代表取締役所長

● コメンテーター
青山恭之
アトリエ・リンク

Art Saitama 2023
さいたま国際芸術祭2023
市民プロジェクト
創発inさいたま

3回目となるフォーラム「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす」は、「さいたま国際芸術祭2023」の市民プロジェクト「創発inさいたま」埼玉会館と浦和の街として企画され、第10回「前川國男建築セミナー」との共同で開催されます。浦和の街の壁として位置づけられる埼玉会館ですが、設計者である前川國男にとって、大学卒業直後の2年間という時期に師事したル・コルビュジエの影響は多大でした。前川の作品を見ていくと、埼玉会館がひとつの転換点を示すように、ル・コルビュジエの作品も、カップ・マルタンの休暇小屋あたりから次の時代が拓かれていくと感じられます。タイミングよく、ものづくり大学でのカップ・マルタンの休暇小屋のレプリカを制作する事業をまとめた本「図解 世界遺産 ル・コルビュジエの小屋ができるまで」が出版され、その精緻な考察から、この小屋の意味があらわになってきました。そこで働いていた「思想の遺伝子」がル・コルビュジエから前川へと引き継がれたのではという仮説を立て、今回はここに議論の基点を置いてみようと考えました。それは今日の街づくりや建築のありかたに対する、大切な内容を含んでいるのではないかと考えるのです。(青山恭之)

※「図解 世界遺産 ル・コルビュジエの小屋ができるまで」——カップ・マルタンの休暇小屋、現地側側面写真——

● 講演者プロフィール

藤原成曉 (ふじわら なりあき)
東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、鬼頭梓建築設計事務所を経て藤原成曉設計室設立。ものづくり大学名誉教授、日本工学院専門学校非常勤講師。

八代克彦 (やしろ かつひこ)
群馬県生まれ。博士(工学)。東京工業大学工学部建築学科卒業後、中国語給費留学生として貴州高原の苗家住居(ヤオトン)研究で西安冶金建築学院(現西安建築科技大学)に2年間留学。その後、札幌市立高等専門学校(現札幌市立大学)を経て、ものづくり大学名誉教授。

橋本功 (はしもと いさお)
神奈川県生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業後、(株)前川建築設計事務所、同取締役を経て、現在代表取締役所長。弘前市から熊本県まで、使われている全国の前川建築の保全改修や、前川建築に関する様々な活動に精力的に係わり続けている。

埼玉会館から広場へ(橋本功)

参加申込方法
聴講無料 定員300名 申込期間：8月20(日)から
定員に達した時点で締め切らせていただきます。
● 申込みフォームでのお申込み (QRコードよりご利用ください。
● メールでのお申込み 下記①～③を明記の上お申込みください。
①氏名(姓) ②氏名(フリガナ) ③電話番号 ④メールアドレス
⑤人数 ⑥同行者氏名 送付先: info-kaikan@sai.or.jp
※件名に「10/9イベント参加申込」とお書きください。
● 窓口でのお申込み
埼玉会館1F受付にて申込用紙にご記入ください。受付時間：休館日を除く 10:00～19:00
※ 最新情報は、埼玉会館ホームページをご覧ください。

埼玉会館 SAITAMA HALL
〒330-8518 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-1-4
お問合せ Tel:048-829-2471(代)
休館日を除く 10:00～19:00
Mail: info-kaikan@sai.or.jp
https://www.sai.or.jp/saitama
電車でのアクセス JR 宇都宮線・高崎線・京浜東北線・浦和線
浦和駅(西口)下車 徒歩6分

— 記録目次 —

序説 (青山恭之) 3

講演1 「カップ・マルタンの休暇小屋、原寸制作から学ぶ」 (八代克彦) 4

コルビュジエを知るための実物調査の旅ルート 4

実測調査旅行 前半戦：カップ・マルタンの2日間 4

実測調査旅行 後半戦：ル・トロネ修道院とマルセイユのユニテ 6

楽器のような美しい響きのル・トロネ修道院 6

東京につながるラ・トゥーレットの修道院 6

暗い廊下にも意味があるユニテの集合住宅 7

映像で見る休暇小屋の建築工程 7

計算され尽くした機能的な休暇小屋の内部 9

ル・コルビュジエ第二弾「レマン湖畔の小さな家」 9

講演2 「カップ・マルタンの休暇小屋から見えること」 (藤原成曉) 11

「建築家である前に優れた生活学者であらねばならない」 11

「建築の向こうに人が見える」鬼頭梓の作品に魅せられる 11

「入札をしない建築家の会」で間近に接した前川國男.....	12
ル・コルビュジエの時代を分ける1952年の休暇小屋の意味は.....	13
世界遺産ル・コルビュジエの小屋のレプリカが大学にあることの大きな意義.....	13
時代の大きな節目を生きて休暇小屋に辿り着いた？.....	14
コルビュジエのアトリエで「最小限住宅」に始まり、そこから離れることがなかった前川國男...	15
コルビュジエの思索の場、カップ・マルタン.....	16
休暇小屋は隠れ家で内部は胎内空間だった.....	17
ロクブリュヌ村の心地よさ.....	17
良い建築ってなんだろう.....	18
レプリカで体感して確信するコルビュジエの光のデザイン哲学.....	19
すべてに意味づけられた休暇小屋の内部の配置.....	20
黄金比の理屈から螺旋の中心は「無」？.....	21
現場合わせの高さ調整と中心線のこだわり.....	22
休暇小屋を知るためのドローイング.....	23
光を意識していたコルビュジエ.....	24
機能性と芸術性は渾然一体.....	25
素のコルビュジエでいられた場所.....	26
手を意識していたコルビュジエ.....	26
ル・コルビュジエと前川國男が求めた平和への想い.....	27
<藤原成暁氏によるドローイングの展示風景と文中に掲載したものを除く展示作品>.....	28
講演3「前川國男に引き継がれたル・コルビュジエの思いと埼玉会館」 （橋本功）.....	32
西洋美術館が世界遺産になった選定理由はコルビュジエの近代建築運動への貢献.....	32
産業革命とともに人間を中心に考える社会へ.....	33
組積造の重い建築から新しい材料により可能となった軽い建築の時代へ.....	33
近代建築は市民の建築、日本ではモダニズム建築に.....	34
戦争と震災の激動の時代に育まれた前川の関心は必然的にコルビュジエへ.....	35
コルビュジエの「白の時代」を身をもって体験.....	36
テクニカル・アプローチにいたる前川の思い.....	37
「結局、人間のためには何も建設しなかった」というコルビュジエの思いを継承した前川.....	39
コルビュジエの作風の変遷を辿るように前川も模索し続けた.....	40
コルビュジエの思いが継承されている埼玉会館のエスプラナード.....	41
トーク：「五感に触れる建築」 （八代 克彦 藤原 成暁 橋本 功 青山 恭之）.....	43
1 段目の階段に見る気遣いの意匠.....	43
埼玉会館にみる細部のこだわり.....	44
次の空間とのつながりや環境を大切にする前川イズムは現代にこそ必要.....	45
「階段は必要なもの」では.....	46
エスプラナードと駅を結ぶさくら草通りは街の軸.....	47
中心がない緩く閉じられた空間の心地よさ.....	48
コルビュジエの黄金比と日本の白銀比.....	48
コルビュジエに見てほしかった関守石にみる日本の文化.....	49
景観を大切にする日本の文化.....	49
都市の記憶の積み重ねによって育まれるもの.....	50
「生活者」としての街づくりをみんなで考える気運が高まれば、人間的な街が.....	50

*本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。

フォーラム まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす 第3回
埼玉会館 前川國男 建築セミナー 第10回

五感に触れる建築

— ル・コルビュジエから前川國男へ引き継がれた思想の遺伝子 —

2023年10月9日（月・祝）13:30～16:30 埼玉会館 大ホール

小澤（司会）：埼玉会館管理課の小澤と申します。埼玉会館では、前川建築としての特徴や魅力を広く多くの皆様にお伝えすべく、2014年から年に一度、建築セミナーを開催しています。10回目となる今回の建築セミナーは、さいたま国際芸術祭実行委員会との共同主催で、フォーラム「まち・みち・たてものを、愛でる・いじる・生かす」第3回と合わせて開催いたします。

序説

青山 恭之（あおやま やすゆき）アトリエ・リング一級建築士事務所

武蔵野美術大学建築学科研究室助手、保坂陽一郎建築研究所勤務を経て、アトリエ・リング一級建築士事務所を共同主宰。武蔵野美術大学、埼玉大学工学部の非常勤講師を歴任。現在、ものづくり大学非常勤講師

皆さんこんにちは。浦和の街をはじめ街がどんどん変わって、古い建物をどうしても軽んじてしまう傾向がある中で、ここに来てくださっている皆様は多分、今ある建物を活かして街を考えていこうっていうスタンスでいらっしゃると思うので、今日の集まりにこんなにいらしていただき感謝しております。

今日は、この春に、ものづくり大学の中のル・コルビュジエの小屋をつくったプロセスをまとめた本が出まして、その本の内容が今の社会において警告を発するような、非常に重要な内容を含んでいるなと思い、著者である先生おふたりにお話を聞いて、さらに前川事務所の橋本所長に、それを前川國男までつなげていただく、というようなストーリーを考えて企画しました。よろしくお願いします。

講演1「カップ・マルタンの休暇小屋、原寸制作から学ぶ」

八代 克彦（やしろ かつひこ）ものづくり大学名誉教授

群馬県生まれ。博士（工学）。東京工業大学工学部建築学科卒業後、中国政府給費留学生として黄土高原の洞穴住居窑洞（ヤオトン）研究で西安冶金建築学院（現西安建築科技大学）に2年間留学。その後、札幌市立高等専門学校（現札幌市立大学）を経て、ものづくり大学に赴任、現在同名誉教授。

コルビュジエを知るための実物調査の旅行ルート

私からは、世界遺産であるル・コルビュジエ（以下、コルビュジエ）のカップ・マルタンの休暇小屋の原寸レプリカをものづくり大学のキャンパスに学生たちと一緒に作り、そのつくった経緯や、学生たちと一緒に現地に赴いた時のこととか、実際にものづくり大学にどんな成果物があるかご紹介したいと思います。

このプロジェクトは「カップ・マルタンの休暇小

屋、原寸制作から学ぶ」と銘打ち、副題が「世界を変えたモノに学ぶ・原寸プロジェクト」です。

これが、現地で撮影した実際の休暇小屋です。

これが、今から十数年前、東北の震災直前2011年2月末から2月頭にかけて行ったルートで、学生たちは大満足だったので、ぜひ皆様にご紹介できればと思います。まずパリのシャルル・ド・ゴール空港に早朝入りして、そこからすぐ乗り換えで直接ニースに飛びました。カップ・マルタンの休暇小屋は、南仏の地中海沿岸、イタリアとの国境近くにあります。実測調査後はマルセイユ経由でパリに戻ってきたというルートです。

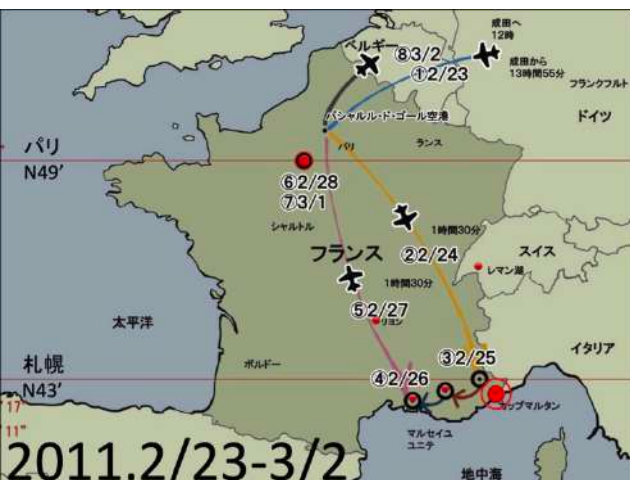
実測調査旅行 前半戦：カップ・マルタンの2日間

休暇小屋の最寄りの鉄道駅、ロクブリュヌ＝カップ＝マルタンから線路沿いに歩いて行くと、伝説で「カバノン (CABANON)」という休暇小屋に着きます。下がそのプラン(図面)です。休暇小屋の内外で、このように最寄駅からスパイラルにアプローチしていく動線が潜在しています。が、実際に私たちが辿った経路は

スライド02：カップ・マルタンの休暇小屋



スライド03：実測調査の旅程



スライド04：

最寄駅ロクブリュヌ＝カップ＝マルタンからのアプローチ



道に迷ったというか海に魅せられて、コルビュジエが溺れて打ち上げられたという海岸に一旦降りてしまって、これが不幸中の幸い、かえってこの土地柄を体感でき、それからまた線路沿いの小道に戻りました。

実測調査は、2011年2月24、25 の2日間だけで、一日目は内部に入れないので下見を兼ねて、外観を、外回りをこんな感じで実測しました。

スライド05：外壁の実測



スライド06：入口まわりの実測

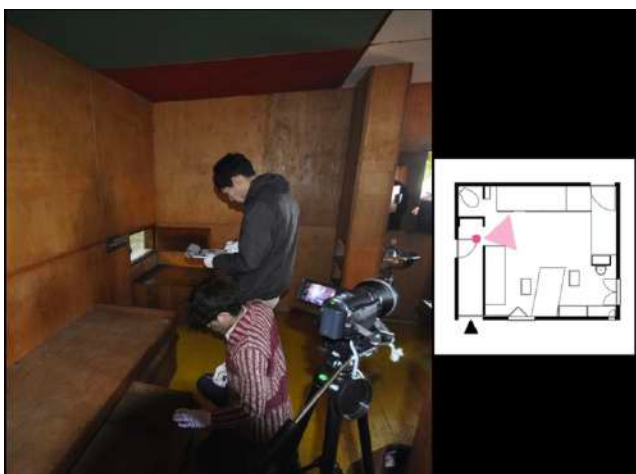


スライド07：入口突き当たりのコート掛け



二日目が予約していた内部の見学日です。総勢16名を4名ずつ4班に分け、一組の持ち時間20分という厳しい制限下で内部を実測しました。さらに「絶対、ものに触っちゃいけない」と言うもんですから、学生諸君はもちろん我々教員も全員白い手袋をはめて最初のうちはおそろおそろ実測してましたが、現地ガイドも我々の熱量に押されたのか、途中から「もう勝手に自由に触っていい!」ということになりました。ほんとラッキーでした。現物は今から半世紀以上も前につくられているので壁面は年紀の入った飴色です。

スライド08：内部実測



スライド09：内部テーブルまわり



実測調査旅行 後半戦：ル・トロネ修道院とマルセイユのユニテ

メインイベントの休暇小屋の実測が終わって、ニースからマルセイユの集合住宅ユニテ・ダビタシオンを見に行くんですけど、マルセイユへ行く途中にル・トロネ修道院というのがあります。コルビュジエ作品の流れとして、1952年竣工の休暇小屋とマルセイユのユニテの後、1955年のロンシャン礼拝堂を挟んで1959年にはリヨン近郊にラ・トゥーレット修道院と上野の西洋美術館といった一連の世界遺産が立て続けに完成します。コルビュジエがこのラ・トゥーレット修道院を設計依頼された時に参考にしてくれと言われたのが、このル・トロネ修道院です。ということで、我々もぜひ見ようということで行ってみました。

スライド10：ル・トロネ修道院



ル・トロネ修道院

スライド11：ル・トロネ修道院内の教会



楽器のような美しい響きのル・トロネ修道院

案内の女性が、なんとなく素っ気なく「ついて来なさい」なんていう感じなんですけれども、最初の教会堂に入った途端 <彼女の歌声を再生> 小さな小さな声で口ずさみ始めて、やがてその声が教会中に響き渡り、学生共々大変感激しました。建築は楽器でもあるんだ、こんなことが起こり得るんだということを体感したものですから、今日は「五感」をひとつのテーマにしていますので、ご紹介した次第です。

東京につながるラ・トゥーレットの修道院

このロマネスクのル・トロネ教会をもとにコルビュジエが1959年にリヨンの近くにラ・トゥーレット修道院を建てました。この修道院には休暇小屋の実測調査とは別の機会に、学生と一緒に行って宿泊しました。同年代の上野の西洋美術館の外壁のパターンというのは、実はこのラ・トゥーレット修道院で一度試して、それからやったと言われています。この外壁のパターンは、東京文化会館でも使われていて、コルビュジエといろんなところでつながっていることを感じました。

それからラ・トゥーレットといえばこの祈りのス

スライド12：ラ・トゥーレット修道院
(右下は上野の西洋美術館)





ペース、小礼拝堂があります。やっぱり素晴らしいなあ、コルビュジエらしいなあと思ってたんですけども、建築をやってらっしゃる方はこの写真を、どこかで見たなと思われるかもしれません。丹下健三の東京カテドラルの地下にある納骨堂のあの雰囲気は、まさにここから持ってきてるなと。丹下さんは亡くなられてここ（東京カテドラル）に遺骨が納められているそうです。

暗い廊下にも意味があるユニテの集合住宅

マルセイユのユニテという集合住宅、これは今、ホテルとして開放されていますので、みなさん、もしマルセイユに行ったらこのユニテの集合住宅での宿泊がおすすめです。コルビュジエといえば、足元のピロティと屋上庭園。このスライドのように足元を空中に浮かして、それから屋上庭園ですが、ここでもピロティ形式の保育園がこんな感じで採用されています。さらにこの集合住宅は、メゾネット形式（住居内に階段があり、中廊下からアプローチする2層空間）で有名なアパートで、中廊下の床の色は黒で全体を暗くしています。案内してくれた女性、彼女はこのアパートの住人でもあります。彼女曰く、中廊下にしたのは意味があって、ここは夜の街をイメージしてつくった、ここで騒いじゃいけない！というメッセージが込められているとのことでした。

以上が実測調査旅行の概略ですが、2011年3月11日、ひとりパリに残った学生の飛行機が成田に着いた直後に東日本大震災！という衝撃的な調査旅行でもありました。

映像で見る休暇小屋の建築工程

さてその結果、どんなものを造ったんだというのを、これから動画でご紹介したいと思います。この動画につきましては、YouTube で「ものづくり大学」「休暇小屋」と検索していただくと、後からでもご覧になれます。最初に、ものづくり大学にいらした時に、その休暇小屋っていうのがどこにあるのか、その全体像をまずご紹介したいと思います。これはドローンで撮った3分程度の短い動画です。

スライド14：マルセイユの集合住宅ユニテダビタシオン



マルセイユ ユニテ集合住宅

スライド15：ユニテダビタシオンの屋上



**上映1 <ものづくり大学 ル・コルビュジエ
「カップ・マルタンの休暇小屋」 ドローン撮影>**

・・・あそこ(入口の左側の壁)に絵が描いてあるんですけど、ここにはレストランが実際には建ってますので、あの壁は存在しない壁になっております。

・・・JR 高崎線の吹上の駅、熊谷のふたつ手前の駅です。歩くと、吹上駅から15分から20分です。キャンパスの中は近隣の方たちの散歩コースですので、外観はいつでもご覧になれます。

じゃあこれは一体どうやってつくったんだということで、・・・



<https://www.youtube.com/watch?v=djKtNOVk88>

**上映2 <カップ・マルタンの休暇小屋#01@もの
づくり大学>**

これは学生たちが小屋をつくりながら自分たちでこのビデオをつくったということを、後から知ったのですが、

・・・こんな感じで学生諸君が小屋をつくっているのを、一日一コマずつ撮って、こういったパラパラ漫画風に仕立ててくれました。

・・・あそこにあります基礎の石は、実は女子学生が大きな石の面を取ってくれて、そして基礎の土台として据えています。

・・・実際の休暇小屋は、ツーバイフォー風の、非常に簡単な工法を使っているんですけども、今回は仕上がりは全く同じ寸法にして、屋根裏とかはいわゆる日本の在来工法でつくりました。

・・・こんな感じで骨組み自体は、パパパッと1~2週間で出来ちゃったものですから、これはたいしたことないなと思ったんですけども、だんだん作り込んでいくと、最後の、特に手で触る部分になると、とてつもなく繊細で「畏るべしコルビュジエ！もう勘弁してください。」みたいな、そんなことになってきます。

これが制作の前半戦で、次に後半戦にいきましょう。

**上映3 <カップ・マルタンの休暇小屋#02@もの
づくり大学>**

先ほどの記録の続きということで、学生がつくってくれました。

・・・ここまでは非常にさっと出来た。
・・・今、地鎮祭を終えたところです。
・・・これを担当してくれた学生諸君は、大学に



<https://www.youtube.com/watch?v=qQ0rI0suqas>

入る前までは全く大工の経験がなかったんですが、これは面白いってことで、のめり込んでつくってくれました。そのうち、今、ひとりは宮大工、ひとりは在来伝統住宅の大工です。

・・・外壁はこういった太い丸太の太鼓落としにした端の材を、下からこうやって並べていくんですけれども、この曲線を合わせるのが大変で、一見、簡単そうに見えたのがこんなに大変だとは思わなかったと、学生諸君がこぼしていました。

計算され尽くした機能的な休暇小屋の内部

ということで、こんな感じで作りまして、じゃあ実際はどうなってるんだということを15分程度ですが、お見せして、私からのプレゼンテーションを終わりにしたいと思います。皆さんがものづくり大学に来られたら、こんな感じでご覧になれるかと思います。

上映4 <「カップ・マルタンの休暇小屋」原寸レプリカの案内>

『ル・コルビュジェの休暇小屋をつくってみたら』



<https://youtu.be/6Mqcq3S0iuE?si=BFqZUbcHUKZSlnHs>

・・・コルビュジェのお墓は実際には現地では休暇小屋からちょっと離れたところにあります。
・・・この窓のマイナスネジですが、学生が一個一個作り込んでくれたというのは、私個人としては一番の誇り、この休暇小屋の一押しです。
・・・今ちょっと見えたんですけど、あの休暇小屋の鍵のキーホルダーは、ユニテの集合住宅のホテルのものをフロタージュしてきて制作したものです。

というようなことで、実際に現地にご案内することできなかったのも、こういう形でご紹介させていただきました。実際にこれを見られないのかというご質問もいただいておりますが、通常は大学内にはいつでも入れるようになってますので、外観はいつでもご覧になれます。それから内部はオープンキャンパスの時に、中を覗けるようにはしておく予定でおります。オープンキャンパスの詳細は、大学のホームページ<<https://www.iot.ac.jp/entrance/opencampus/>>をご覧ください。

ル・コルビュジェ第二弾「レマン湖畔の小さな家」

最後に原寸制作・第二弾のご案内です。ものづくり大学には、「休暇小屋」と、それからコルビュジェ第二弾でスイスのレマン湖畔にあります「小さな家」、この住宅は「母の家」とも呼ばれていますが、その外構（建物部分の基礎と庭の芝生・通路）とト

スライド16

左：ものづくり大学原寸制作案内図
右：「レマン湖畔の小さな家」



レードマークの横長の窓が、この2022年3月に完成しました。左の地図に示しましたが、JR 高崎線の吹上駅からバスでも行けますし、歩いて約15分です。新幹線沿いの調整池の畔に「休暇小屋」とその右側に「小さな家」をプロットしました。つまり、調整池を「休暇小屋」では地中海に、「小さな家／母の家」ではレマン湖に見立てた次第です。右側の写真上下2枚が「小さな家」です。外構だけで抽象的な表現に留めましたが、雰囲気はよく伝わっているかと思います。お時間がありましたらお出かけいただければと思います。

最後になりますが、実際に学生たちと現地に行って、そして原寸で制作してみて、嗚呼よかった！とつくづく思います。今日もこのプロジェクトに関わった学生が何名か会場に来てくれてますが、教員の立場からすると、自分でつくることの責任感というか使命感、そういうものを学生が徐々に抱きつつ、誰一人として途中で逃げ出さなかったというのは本当に誇りに思い感謝しています。

簡単ですが、私からは経過・現状報告ということでご紹介させていただきました。

ありがとうございました。



講演2 「カップ・マルタンの休暇小屋から見えること」

藤原 成暁 (ふじわら なりあき) ものづくり大学名誉教授、特別客員教授、藤原成暁設計室 主宰

東京都生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業後、鬼頭梓建築設計事務所を経て藤原成暁設計室設立。

2006~2019年：ものづくり大学に奉職

他に日本工学院専門学校非常勤講師

「建築家である前に優れた生活学者であらねばならない」

私は世田谷区で生まれたんですが、小学校の頃に世田谷区民会館、これも前川國男の設計ですけれども、そこで小学校6年生だったと思いますが、コーラスをみんなで歌った経験があります。その時以来2回目の舞台で、前川先生との不思議な縁だなと思ってるんですが。今日は、コルビュジエの話を書いていただければと思います。

私の恩師が実は鬼頭梓という建築家で、そのまた恩師が前川國男でそのまた恩師がル・コルビュジエということになってまして。私もそういう意味ではコルビュジエからいうと、ひ孫弟子という、ひ孫弟子は山ほどいると思いますけれども、爪のアカぐらひは遺伝子が私の中にあるのかなと思っています。

コルビュジエはこういうことを言ってます。「建築家である前に優れた生活学者であらねばならない。」私は、とてもいい言葉だなと思って、いつもこれを肝に銘じるようにしています。つい、我々は専門家気取りで、偉そうなことを言ったりするんですけども、一般の生活者の目線を忘れて、社会と遊離しがちな態度を戒めた言葉ではないかと思っています。

「建築の向こうに人が見える」鬼頭梓の作品に魅せられる

私の恩師である鬼頭先生の作品を、ちょっとだけご紹介させていただければと思います。私が実は建築を志したのは、この中央にあります山口県立山口図書館、この作品を私が学生時代に見て、とても品格があってそして優しいっていうことをこの建物から感じまして、建築ってこうい



鬼頭 梓
日本の戦後図書館建築のパイオニア
1926—2008



うことができるのかって思ったんですね。要は、ものの向こうに人が見える。建築の向こうに人ってというのが見える。そういう建築作品ってあるんだ。これは私にとって、それまでの建築像とは全く違うものでした。それで、本気でちょっと建築に取り組んでみようかなと思った作品です。

その後、東京に戻ってきまして、同じこの鬼頭梓という建築家の作品を見て回りました。上にあるのは、東京国分寺にある東京経済大学の図書館、それから日野市にあります日野市立中央図書館、右下に品川教会グローリアチャペル、これは現在の建物なんですけれども、建て替え前の旧品川教会の幼稚園と教会を見せてもらって、どれも同じ印象でした。規模も違います、それから用途も違います。だけれども、そのものの向こうにやっぱり同じ人が見えた。それで、これは只事じゃないなということを感じまして、その後も、左下には山口県立美術館がありますけれども、こういった作品群を見て、ようやく私の建築に対するスイッチが入ったということです。

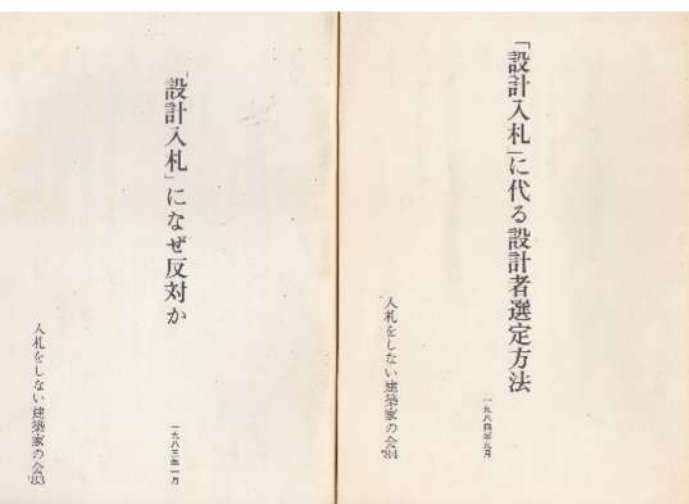
その後、鬼頭事務所の一員として、修業させていただきました。左下の三つが、私が担当しました作品です。鬼頭先生は、戦後の図書館建築のパイオニアと言われていますが、私の場合は袋井市の図書館、三田にあるオフィスビル、それから集合住宅など、いろいろ担当させていただきました。

「入札をしない建築家の会」で間近に接した前川國男

それから前川國男について、簡単にお話しさせていただきます。埼玉にはこの三つの作品があるのはもう皆さんご存じの通りです。県外作品としては、一番上にあるのが、1959年に出来た世田谷区民会館・区役所。これは残念ながら、もうほぼ取り壊しが決定しています。右下の東京海上ビル、ついこの間まで皆さんで保存運動をやっていただきましたが、これも取り壊しということになりました。私が前川建築で一番好きなのは、1963年竣工の、岡山県にあります林原美術館。前川作品としては初期の美術館ですが、とても印象に残っている建物です。



初めて前川さんを間近に接したのは「入札をしない建築家の会」(1980年発足)でした。私が建築を志してまだ間もない頃の話ですけれども、その会の末席に参加させていただきました。会では、こういう小冊子を印刷して各方面にアピールすることなどの活動を行っていました。いい建築をつくるためには、やっぱり金額の多寡で設計者を決めてしまうというこの体制自体に問題がある。70名ぐらいの錚々たる建築家が集まり、私は下足



番みたいなことをさせていただいたんです。その時に、必ず月一回、定例会を行っていたんですけども、前川國男が私の目の前に毎月必ず現れるという、とんでもない光栄というか機会に、毛穴から前川國男が感じられる、そういう貴重な時・空間を経験することができました。一度も言葉を交わしたことはありませんが。

ル・コルビュジエの時代を分ける1952年の休暇小屋の意味は

大学で休暇小屋のレプリカをつくって、ようやく今年の3月に小屋に関する本を出版することができました。本を出版する機会を得て、見えなかったことがいろいろ見えてきました。



ル・コルビュジエ
近代建築の巨匠
1887—1965



1952年にカップ・マルタンの休暇小屋が出来て71年、私は1953年生まれなのでほとんど同い年に近いんですけども、この休暇小屋以前の建物は「白の時代」と言われています。新しい建築をつくるには、自由な平面、自由な立面、ピロティ、横長窓、屋上庭園という五つの方法があるんだと。それを具現化したのがこの時代を代表するサヴォア邸です。

休暇小屋以後、この右側に「以後」と青い丸で囲ってあるところのロンシャンの礼拝堂は、以前とは真逆と思われるような作品に変わるんですね。私は、根っこでつながっていると思っていますけれども、この休暇小屋を境に

右と左にはっきり大きく変わったように見える。実際、変わっている部分もありますが、その変化に休暇小屋での生活が、とても大きな意味を持っているんじゃないかと考えています。晩年、先ほどご紹介がありましたラ・トゥーレット修道院や国立西洋美術館、それからチャンディーガルの都市計画。こういった名作をつくっていくことになります。

そしてこの写真、これは「手」なんですけれども、人によっては鳩が飛んでいるように見えると言われています。最後はこういうところに行き着くコルビュジエを知ること、改めてコルビュジエを理解する手掛かりになればと思います。

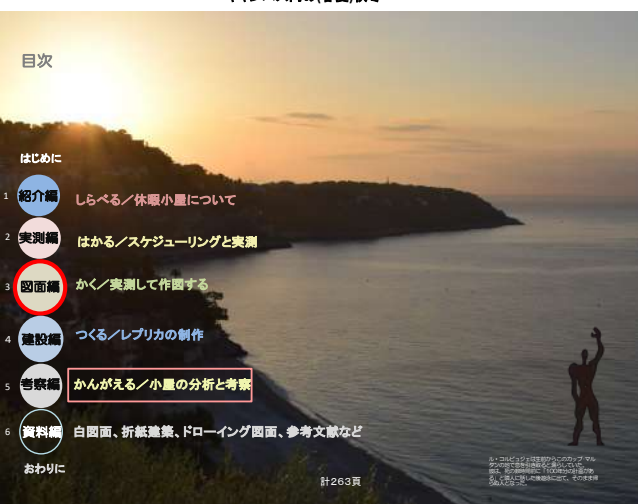
世界遺産ル・コルビュジエの小屋のレプリカが大学にあることの大きな意義

大学で休暇小屋のレプリカをつくりまして、その経緯と実測図面をぜひ形に残しておきたい。それで、お陰様でこういう本になったのは大変ありがたいことだと思っています。この本は一応、八代先生と私のふたりが著者になっていますが、私たちはとりあえず代表しているだ





キャンパス内の(春夏)秋冬



時代の大きな節目を生きて休暇小屋に辿り着いた？

今はAIの時代で、なかなかものを考えるということがだんだん難しくなってきたような時代ですけれども、ぜひこの「かんがえる」という視点に立って小屋を見ていただけると、とてもいろんなことが発見できると思います。

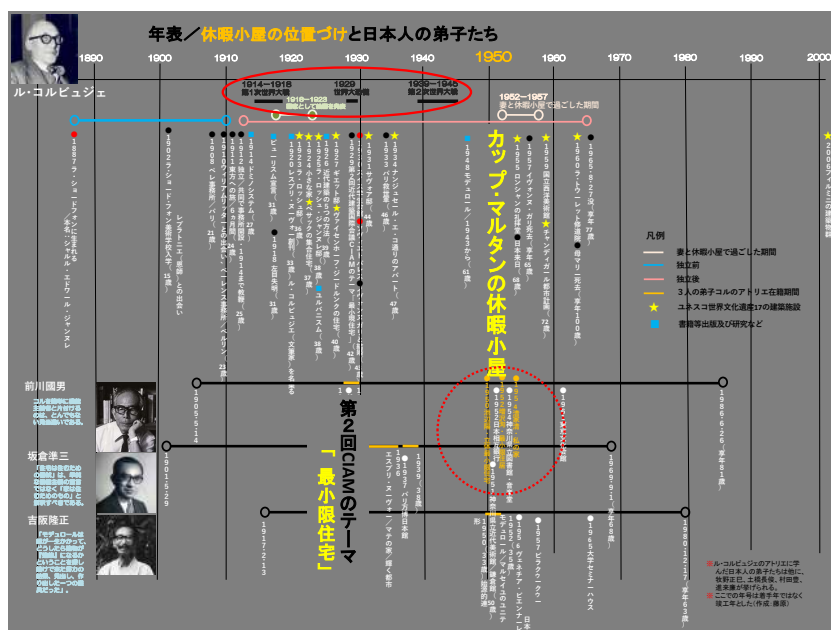
「年表／休暇小屋の位置付けと日本人の弟子たち」をご覧ください。休暇小屋というのは、コルビュジエの77歳の生涯で、65歳の時の作品です。ほとんど晩年に近いところで、この作品が出来ているということです。なんで、こんなちっちゃな犬小屋に近いような建物が世界遺産なのかということですが、見ていけばいくほど、噛めば噛むほど味が出て、より大きな問いも生まれる、そういう作品だと思います。

コルビュジエはラ・ショー・ド・フォンという時計の有名な街で生まれて、初めは時計の仕事をやろうと思っていたらしいですけれども、美術学校に入って、レプラトニエという先生に出会う。私は、これがコルビュジエにとってとても大きなターニング・ポイント

けであって、本の最後に記されています関わったメンバーの、本当にこの学生たちの力、血と涙と汗の結晶であると思います。

上の写真は冬の雪の降ってる写真で、現地ではこんなことはあり得ませんけれども、この休暇小屋のレプリカが大学にあることで、こうやって一年中すぐにいつでも見られるということがとても大きな意味を持っています。何か気になったことがあるとすぐに行って、確認することができます。あるいは、見学の方をご案内させていただいたりすることによって新しい発見があります。一年中そばにあるってことが、こんなに大きな教育的な意味があるのかということを感じます。

本の目次を見ると6章立てになっていて、本のタイトルに「図解」とあるように図面編が中心になるんですけども、これからお話しさせていただくのは、5章の「かんがえる」ということ、考察編についてお話をさせていただければと思います。



ントだったと思います。お前は建築をやれってということで、そこから建築の方に目が向いたと聞いてます。

私も教育者の端くれとして、いつも学生たちとどう接していったらいいかなと思うんですけども、「世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り。千里の馬は常にあれども伯楽は常にはあらず」という言葉、私は常にそれを心がけるようにしています。多分コルビュジェにとって、このレプラトニエ先生は伯楽だったんじゃないかなと思います。

そして紆余曲折して、最終的にこのカップ・マルタンの休暇小屋は65歳の時に出来るわけです。終の棲家と言われるように、「この休暇小屋の住み心地は最高だ。私は、きっとここで一生を終えることになるだろう」ということをすでに予言して、その12年後に、まさにこの地で亡くなるわけです。

私はやはり、コルビュジェという人がこのカップ・マルタンの休暇小屋という作品をつくる前の、第一次世界大戦とか第二次世界大戦あるいは世界大恐慌とか、そういった大きな節目を生きてきたことがとても影響しているのではないかなと思っています。この休暇小屋の3年後に、ロンシャンの教会が出来ています。そして、そのさらに7年後に先ほどの名建築、ラ・トゥーレットの修道院が出来ています。

コルビュジェのアトリエで「最小限住宅」に始まり、 そこから離れることがなかった前川國男

コルビュジェの日本人の3人の弟子として、他にも何人も弟子はいらっしゃいますが、特にこの前川國男、そして坂倉準三、それから吉阪隆正の3人の建築家がよく取り上げられます。前川さんが一番最初の弟子になるわけですが、やっぱり3人が行った時代によってそれぞれ三者三様に受け取る内容が違っているということですね。コルビュジェの関心のあるところに赴いて、やっぱりその弟子達が大きく影響を受けていると思います。

前川國男は、コルビュジェから第2回近代建築国際会議（1929年）のテーマ「最小限住宅」を任される。その後晩年になって、編集者の宮内嘉久さんとの対談の中で、「私は今までいろんな建物をつくってきたけれども、最小限住宅のことしかやってこなかったんじゃないか」と漏らしています。実に謙虚な発言だと思いますけれども、最初に携わった仕事、そしてその時に前川さんにコルビュジェは、「これは最小限住宅のプランだが、これだけで完結しては困るんだ。これが核になって、いろんな展開が、住宅としてだけではなくて、建築の空間として、ヴァリエーションをつくり出せるようなものでなくてはだめだ」と諭されたそうですけれども、本当にその通りになっていると思います。

ちょうど休暇小屋ができた頃、1952年前後ってというのは、日本の建築界も同調していて興味深い時代です。清家清（せいけ きよし）さんであるとか、増沢洵（ますざわ まこと）さんであるとか、池辺陽（いけべ きよし）さんであるとか。やっぱりそういう小さい建物をつくっています。こんな符合ってというのはあるんですね。



やっぱり、本物は現地に行かないとわかりません。けれども世界遺産後の小屋の見学時間は15分か20分くらいで、ほとんどその空間を味わうことはできません。むしろ中をご覧になるのであれば、ものづくり大学に来ていただいた方が、何時間でもご覧になれると思います。我々は、身近に精緻なレプリカがあることでいろんな発見ができたのです。

休暇小屋は隠れ家で内部は胎内空間だった

これは現地でスケッチしたものです。この会場のホワイエに展示してありますが、いつもこういうフィールドノートと、スケッチノートと称して持ち歩くようにしています。

この右側のスケッチは、最初の現地調査の時に描いたものです。注目していただきたいのは、小屋の手前にシンボルツリーがあって、その隙間から目玉のように窓がひとつあります。これは内部から木を見るための窓もありますが、こっち側を監視できるんですね。手前がアプローチで休暇小屋に入っていくところですけれども、あの窓からこっちを覗いている。

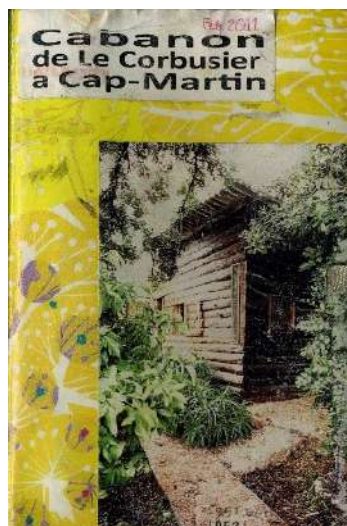
コルビュジエは実は、31歳の時に左目を失明しています。右目でこっちを見ているわけです。まさにこれ、ほとんど窓しか見えない。全体が隠れていて、手前に結界としてのシンボルツリーがあるため建物の全貌はほとんど見えません。

これは、隠れ家なんですね。中に入ると、実は、胎内空間であることが理解出来ます。人間は始めは母親の胎内にいて、一番安全で安心で、小さくて生ぬるくて毛深いっていうか、そういう場所にいて、そういう記憶がDNAの中に残されている。電車に乗っても端っから、喫茶店入ってもどうも隅の方から座るような性質があって、そういうところが安心かつ安全だというのがあって、そう思うと思います。

まさに胎内空間ですから、これぐらいが一番いい大きさなのかなと思います。イボンヌへのプレゼントというのが元々発端ですけども、ふたりのための空間なので、大きなスペースは必要としないわけです。

ロクブリュヌ村の心地よさ

この左側のスケッチを見ると、ここに屹立しているのは糸杉なんですね。これがすぐ目の前に立っています。何か死を暗示しているようで、つまり、糸杉はフランスの墓地によくあるので、ゴッホがよく「死」の象徴として描くんです。因みにゴッホにとって、ひまわりは太陽で「生」の象徴っていうことに



シンボルツリー／結界としてのイナゴマメ



小屋は周囲の環境と三位一体



なっています。

右から2番目のスケッチにあるような坂道を登って、ロクブリュヌ村に入っていきます。更に進んでいくといくつものトンネル（右端のスケッチ）を通して、バナキュラーな景観に感動しきりでした。トンネルを潜っては、またこういう階段上の山肌というか、山岳都市ですので、これには私はもうびっくりしまして、「なんだ、こんな素晴らしいところがこの背後にあったのか」と。これ無くして、休暇小屋は成立し得ないなと思いました。それで夢中になって、とにかく感動が手を動かして、スケッチを重ねました。とても素晴らしい村だと思います。

いろんな形があってバラバラだし、もう本当にぐじゃぐじゃなんです。色もいろいろあるんですが、なぜ、これが統一感があって安心できて、とても気持ちがいい村なのかなっていうと、多分これは、アースカラーが主原因じゃないのかな。つまり、土地のものを、現地の材料を使っているものですから、みんな細胞が一緒ということ、多分そういうことなんじゃないかなと思っています。

バナキュラーな中世のロクブリュヌ村



アースカラーで景観をつくる



様々な住戸の出入口
アースカラーが統一感を与える



良い建築ってなんだろう

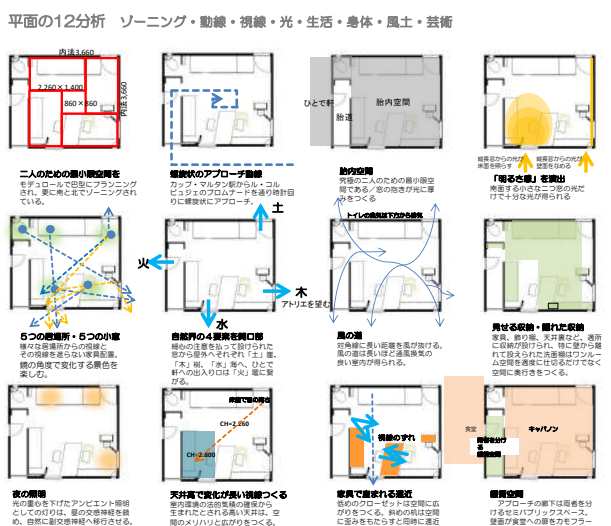
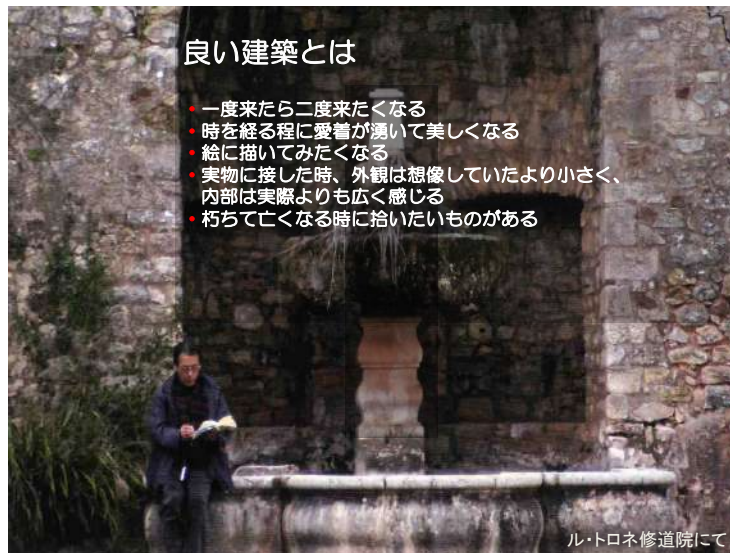
私が今まで建築っていうものを見てきて、「いい建築ってなんだろうか」という問いを持つことがあります。五つ、ここに書いてありますが、「一度来たら二度来たくなる」ような、二度来たら三度来たくなるような、そういう建築は多分、いい建築なんだろう。そして「時を経るほどに愛着が湧いて美しくなっていく」。出来た時が一番かっこよくて、だんだん時間が経つとなんか汚くなってくるような建物じゃなくて、いい建物は時を経る

レプリカで体感して確信するコルビュジエの光のデザイン哲学

それで、本の中に書いてありますけれども、いろんなことを分析しました。左上に示すように卍型に空間をゾーニングしていたりとか、これはいろんな方がもうすでに検証されていることですが、螺旋状にアプローチするとか、胎内空間と光の入り方とか。



そして先ほどのビデオにもあったように、一旦全部窓を閉じて暗くして、この隙間から入ってくる光、この状態を見た時に、もちろんこの辺のことはコルビュジエはわかってたと思いますけれども、私は多分ここで、光の入り方を確信したんだと思います。その結果、3年後の1955年のロンシャンの教会に至る。つまり、ロンシャンの光とこの休暇小屋の光は同質であるということです。規模も用途も違いますが、光は全く同質の光だということを、私もここに



ロンシャンの教会と同質の光

闇に生まれる一筋の光・壁の厚さは光の薄さ
ただ明るくだけ光ではない。ロンシャンの礼拝堂の光を
防壁とさせる光の正体は、建具の隙間から漏れた極限まで
コントロールされたわずかな光。この見掛けに対して深い
窓の奥から差し込む光は、700年の正方形に付属する
新戸に戸当たりがないことでより効果的である。

闇と光／見えない闇にこそ神は居る

光は古来より万物を浄化するものとされ、様々な
願望にも用いられてきたことを思うと、この小屋で光を見つめ
ながら内省を重ね、深く思索する
時間を過ごしていたことは想像に難くない。

入って窓を閉めて、隙間から入ってくる光を見るという体験を通じて感じました。実際、ロンシャンに行っても同じことを感じます。これがロンシャンの中の光です。

我々はよく「窓の抱き」と言うんですけれども、その窓の壁の厚さによって、つまりトンネルから入ってくる光と薄っぺらい壁からの光とは全く同じ面積でも意味が違う。こういうことを多分コルビュジエは、この生活している中で確信したんだと思います。でなければ、こんな窓の小さいロンシャンなんかはつくれないと私は思います。そして問題なのは、あの上の方に細いスリットがありますけど、こういうところがやっぱりコルビュジエは過去の、先ほどお話しした近代建築の五つの新しい方法、五原則という言い方をすることもありますけど、このこととつながっている部分があり、大変面白く興味深いところです。

これも先ほどのビデオにもありましたが、縦長窓から入ってくる光が、一番大きな壁を舐めて、その壁に光が当たることによって、この狭い8畳の空間が明るく感じるんですね。コルビュジエは「光の壁をつくるということは、内部の建築的な要素を構成することだ」と言っているわけですが、そういう難しい言葉じゃなくて、実際に体験・体感すると、こんなちっちゃな窓でもこれだけ明るくなるんだっていう驚きがあります。



すべてに意味づけられた休暇小屋の内部の配置

そして今回、ホワイエに展示させていただきましたけれども、こういうドローイングをいろいろ試みてみました。ここにある「堂塔社殿建立は四神相応の地を選ぶべし」というのは、法隆寺の口伝として現代まで伝えられてきた一番最初の言葉なんです。一方、前川國男は「建築はその建っている場所に従え」という言葉を遺しています。コルビュジエにも、同じような発言があります。

これも繰り返しになりますが、アプローチの階段を降りてくるとパブリック性の高いアトリエがありまして、そのアトリエからコンクリートのたたきがあって、更に進むと、結界としてのシンボルツリー（イナゴマメ）の奥に見えないようにひっそりと非常にプライベートな胎内空間としての休暇小屋があります。

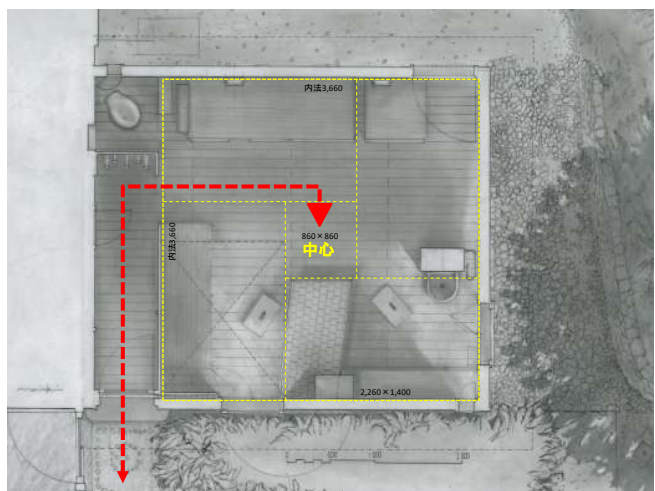




なかなかこういう周囲との関係が分かる図面がないものですから、レイアウトを実際に測量して、できるだけ全てをドローイングで表現してみました。

そして中に入ると、柱のような、いわゆる洗面台のある化粧棚があります。これひとつあるだけで、この空間の意味が全然違ってくる。斜めに突き出た机があったり、ひとつひとつに意味があるってことが、だんだんわかってきます。奥行き感や空間に厚みや動きが生まれます。

また、天井伏図から判断できますが、図面の下半分と上半分にそれぞれ昼と夜の居場所が設定される一方、卍型に組まれた四つの黄金比の長方形の領域にそれぞれの機能を与え、複合的に生活領域がゾーニングされています。それに対して、小屋の中央の黄金比の長方形で囲まれた正方形の領域には、特にこれといった何かをする場としての機能を与えていません。敢えて言えば、この四つの領域を緩衝あるいは統合する機能があるのかなと、思考は尽きないんですが、この中心部は、駅から大きく弧を描くようにアプローチする時の最終到達点であり、外に向かっては、螺旋の始まりとして重要な核に相当すると考えられます。



黄金比の理屈から螺旋の中心は「無」？

黄金比を導くフィボナッチ数列の第一項が「0」であることとも符合します。さらに言うと、後のラ・トゥーレット修道院の中庭にも通じるものがあると思います。

1対1.618っていう黄金比はフィボナッチ数列からも導き出せる。フィボナッチ数列は、「0」から始まります。何もない世界「ゼロ」があって、そこで新しい世界がひとつ生まれる。そうすると、今ある世界は「0」と「1」の世界があることで、「0」と「1」が融合すると、つまり「0 + 1」ということなんですけれども「1」が出来ます。「0」と「1」から「1」が生まれるわけですね。最初の「1」と次の生まれた「1」は、意味が全然違うわけなんですけれども、その「1」はどうやって生まれたかという、過去の「0」と「1」を足したものですから、次はどうなるか。今ある「1」とひとつ前の「1」を足すことになります。そうすると「1 + 1」で、「2」が出来ます。同じことを繰り返して、この「2」と「1」を足すと「3」が出来ます。「3」と「2」を足すと「5」になって、「5」と「3」を足すと「8」になって、つまり、昨日のものと今日のものを足していくと数列ができます。

*フィボナッチ数列

次の項は前の2項を足して出来る数列。

0・1・1・2・3・5・8・13・21・34・55・89・144...

黄金比はフィボナッチ数列の（次項） / （前項）

1/1=1

2/1=2

3/2=1.5

5/3=1.6666...

8/5=1.6

13/8=1.625

21/13=1.6153...

・

・

・

□/△= →1.618...→黄金比に限りなく近づく

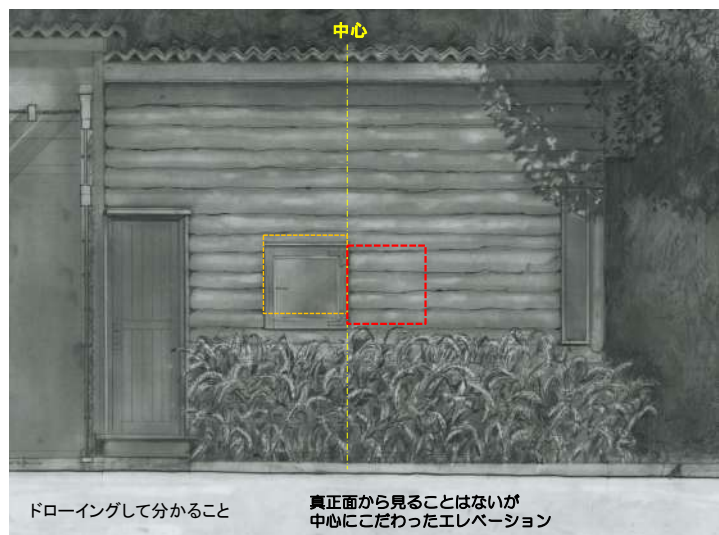
この数学者のフィボナッチが発見した数の列がどんどんどんどん増えていった時に、今度は前の数で割り算するとそれが限りなく1.618になるんですね。この数列は先に行けば行くほど黄金比に限りなく近づく。

だから、最初は「ゼロ」でいいのかなと。そうすると真ん中、中心は「無(有)」というブラックホールのような不思議な空間があっても良いというアナロジーが成り立つのではないかと。これは、ちょっと私の妄想ということで聞き逃していただいていいと思いますが・・・

現場合合わせの高さ調整と中心線のこだわり

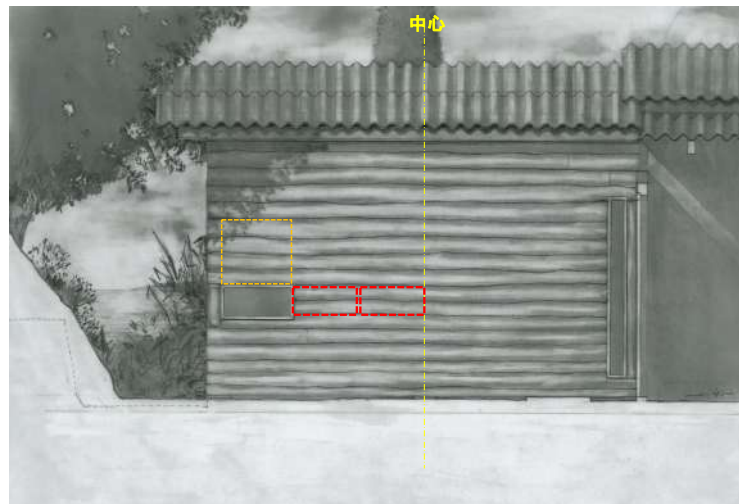
実際にはこの図のように真正面から見ることはありません。図面に描いてみますと、窓の位置が、破線で黄色で描いたものが元々想定していた位置なんですけれども、現地では少し下げています。モデュロールという黄金比で決められた寸法体系をコルビュジエが自分でつくりまして、それに基づいて多くの寸法を決めているわけなんですけれども、そのモデュロール寸法をあえてここでは変更しています。それはもちろん外を、地中海をどうやって見るかということとも関係してくると思いますけれども。僕は現地へ行って、ここがやっぱりコルビュジエの素晴らしいところで、モデュロールにばかりに頼ってるわけじゃない。それはあくまでもひとつの物差しに過ぎなくて、やっぱり現地で一番いい形になるように寸法を変えるという現場主義が見て取れます。

そして、立面図に中心が設定されていることもわかりました。この正方形の窓を180度開きにすると、ちょうどふたつの正方形が並ぶことになります。そして、ふたつの真ん中が中心になっている。これ、なんでこんなにこだわらなきゃいけないのか。やっぱり微妙にずれるのは気持ち悪いっていうのがあるのかもしれませんが、この窓は内部的にもきちり収まっているので、まさか外観に対しても、こういうことになっていたとは夢にも思ってなかったんです。内部から建具が見えない180度開いた状態がベストで、それを前提としたエレベーションになっています。



現地の小屋は、向こうに一本立ってる糸杉のところの奥にちょこっと見えますが、このように海岸からもほとんど見えない。（左のドローイング：赤○部分）小屋を見えるように描くっていうのが本当なんだろうけど、この絵は逆に見えないというのを描きたくて描いたドローイングです。

そして、脇（正面右の側面）に廻ると、このアプローチに面した立面も正面と同様です。こっちもイナゴマメの手前に大きなシンボルツ



木陰(外部空間)からの眺めと糸杉との位置関係

リーがありますから、この面の全貌は見えません。そこで、ちょっと待てよと、やっぱり中心が基準になっていて、この窓を開けると二つ目の窓がちょうどこの位置なんですね。これは、コルビュジエに聞いてみなきゃわからないですけども。こんなことをいろいろ妄想して、でも多分これは間違いがないんじゃないか。

増築してますので、3面しか外壁はありません。裏側の立面についても、それほど厳密ではありませんが、中心を意識しているのがわかります。そして元々は設計図は大きな700角の窓をつける予定(黄色い破線)だったのが、実際はこういう横長窓がついています。中心から三つ分、やっぱり中心を意識していたと思います。

休暇小屋を知るためのドローイング

この休暇小屋はいろんな見方ができますけれども、やっぱり簡素にして豊か。「たとえ素材は質素であろうが粗末であろうが、家は宮殿であるという確信に動かされてきた」というコルビュジエの言葉と符合すると思います。

ドローイングについて、もう少しお話しさせていただくと、なんで今頃、こんなバカバカしいドローイングをしなきゃいけないのか。今は、CADで描けばアッという間に出来るんじゃないかって思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、CADではなかなかここまでは出来ません。もうちょっとCADが発達すれば出来るかもしれませんが。

簡素にして豊か

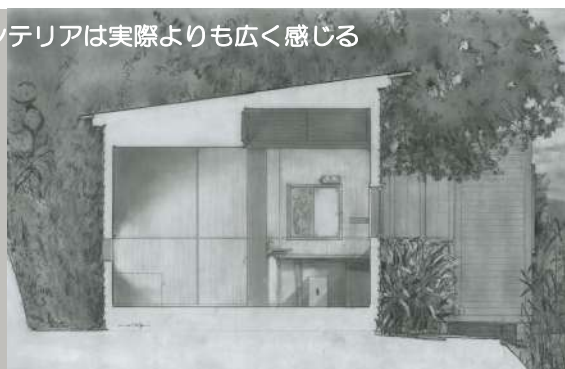
「たとえ素材は質素であろうが粗末であろうが、家は宮殿であるという確信に動かされてきた」

ル・コルビュジエ



• 一方、インテリアは実際よりも広く感じる

建築は室内空間があつてこそ、多様でリッチな内部空間は広く感じる。
「室の室たるはその空にありノ老子」



(左の画面) 上の断面図はすぐ脇に植栽があり、それから向こう側に大きな糸杉にイナゴマメが小屋を覆っていて、さらにその向こう側にアトリエがあります。そして左側の方は崖になっていて、向かって右側は地中海になります。こういう周囲の状況を全部を描いて、関係性を描くことが特に大事です。

要は、建物は「その場所に従え」と言いますが、まさにこの周りの環境を描いて初め

ここに提示されている作品の原画のうち1点は、本書に掲載されているものですが、この原画、改めて点を描き下ろしています。どれも写真から得たインスピレーションと想像力を基に想像したものです。

て、この休暇小屋の意味、建築の意味が見えてくると思います。なので、忠実に全部描くというドローイングを試みているわけです。

また、これは写真を見ながら合成したものなんですが、オリジナルの写真だとハレーションを起こしてまして、窓から向こうに見える木が白くなっていて見えないもんですから、その辺を誇張して描いたりとか。実際の写真には存在しないイボンを左側に座らせてみたりとか。これも合成すれば写真でも出来るかもしれませんが、勝手に写真をいじる訳にはいけないのでドローイングで表現しています。



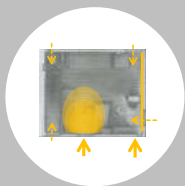
光を意識していたコルビュジェ

コルビュジェは光を意識していました。この「窓の効果的な配置」については、この絵を見ていただくとわかるんじゃないかと思いますが、外の景色が床に反射すると同時に、斜めの机にも反射して、こういう光の形を作るわけです。左は、それを平面図に表したものです。右下の縦スリットの窓から入ってくる光が一番広い大きな壁を舐めるという効果による光の意外性なども考えながら、時間のかかる手描きのドローイング体験を通して感得できたことです。

突然こんな写真を出してなんだろうと思われるかもしれませんが、これは福田繁雄さんというグラフィックデザイナーの作品です。上の塊はナイフとフォークとスプーン。

これらを溶接したゴミの山のように見えるものに、ある一定の場所から光を当てると、とんでもなくリアリティのあるオートバイの影が床に映し出されるわけです。この一見ゴミの山とも見える塊にピンポイントからの光が当たると、このゴミの山がゴミの山じゃなくなるという、非常に示唆的な作品を残しています。これが面白いのは、光の方向を変えるとこの像を結ばないということです。この場合は、影が主役だと思いますが、光を当てないとこの影は生まれてこないという、いろんな見方ができる作品です。

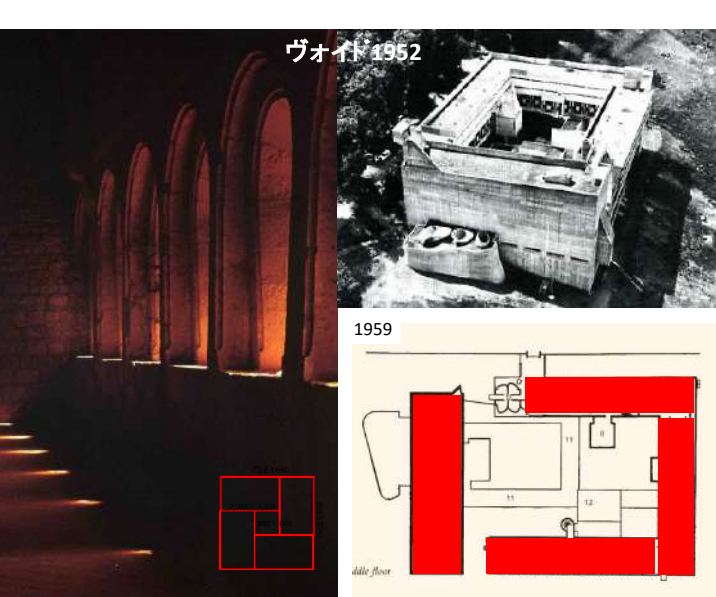
限られた窓の効果的な配置



光の方向



「ランチはヘルメットをかぶって・・・」1987／福田繁雄



ヴォイド 1952

1959

それから、この休暇小屋の卍型の空間構成は、後のラ・トゥーレットにも実は影響しているのではないかと妄想しています。大きさは違いますが、中央にやっぱりこういう空白の空間があります。

左側の大きな写真は、ル・トロネ修道院の写真になります。この修道院を見てラ・トゥーレットをつくったということは、先ほどのお話のとおりですが、こういう空間性っていうのは、やはりこの1952年にできた休暇小屋の

存在が、大きな意味を占めているのではないかと思います。

機能性と芸術性は渾然一体

前川さんは「一建築家の信条」という本の中で、「虚の空間、ヴォイドの部分が美しいか美しくないかって騒ぐわけだけでも、そこに言ってみれば、虚実皮膜の間に、建築にとって大事な問題が隠されているんじゃないか」と語り、コルビュジエは「機能主義は美をつくり出すのに必要ではなく、芸術は有用性から全く独立したものである」と言っています。コルビュジエを機能主義的建築家と呼ぶのは大きな間違いであると、前川先生は言ってるわけです。

美と芸術、機能性と芸術性というのは非常に渾然一体となって、どこでどう線引きしたらいいのかは難しい問題ですけど、この休暇小屋で面白いのは、この机の下の一本足にもあります。この足の断面は凸と凹の関係になっていまして、下がキュウっとすぼまっています。これはもちろん機能的に考えれば、下側は邪魔にならないように、ぶつからないように狭くするという見方もあると思います。けれども、この凸と凹にする理由がどうもよくわからない。でも、こういうことをいろんなところでやってるわけです。

ある人は、「真の美は合理の近傍にある」と言い、合理だけでは答えは出ないよっていうことも言ってますし、「芸術的認識は知的認識に先行する」という言葉もあります。

これ（上の写真）がラ・トゥーレットの雨落としの部分なんですけど、象の鼻のようにも見えます。これがどうも私はこれ（机の一本足のデザイン）によく似てるかなと思ったりもするんです。コルビュジエは女性の足だというような言い方もしているようで、なんとも様々な解釈ができます。



機能主義は美をつくり出すのに必要ではなく、
芸術は有用性から全く独立したものである
ル・コルビュジエ

「一建築家の信条 前川國男」より
虚の空間、ヴォイドの部分が美しいか美しくないかって騒ぐわけだけでも、そこに言ってみれば虚実皮膜の間に、建築にとって大事な問題が隠されているんじゃないか

素のコルビュジエでいられた場所

コルビュジエは、毎日欠かさず海水浴をしていたそうですが、その時の写真をアレンジしてドローイングしたものです。コルビュジエの先に光を、水平線まで描きました。やっぱり、コルビュジエは光を見てたんじゃないかな、微かな希望を表現しようとして、それでこのようになりました。

村の人たちが遊泳中に亡くなっているコルビュジエを海から引き上げた時は、「小屋のおじさん」という認識しかなかった。隣の一膳めしや（レストラン）のトマ・ルビュタートはよく知っているわけですが、引き上げた村の人たちにとっては、ただの小屋のおじさんだった。その日のうちにフランス中、あるいは世界中にコルビュジエの訃報が伝わります。そのニュースを聞いて初めて、おじさんを引き上げた村人たちは、あれが天下のコルビュジエだったことを知るというエピソードがあります。私はそれを聞いて、ここには間違いなく、身も心も素のコルビュジエがいたことを確信します。

終の棲家

素のコルビュジエの隠れ家



前川國男の追悼文（文藝春秋1965.5）
…彼の愛した南仏カップマルタンの海で不慮の死を遂げた。彼の遺体を海から救い上げたのは、毎日海におりていく彼を「おやじさん」と呼んで、「それが高明の建築家コルビュジエとはついに知らなかった『近所の人たち』だった…



わたしの休暇小屋の住み心地は最高だ。
きつとここで一生を終えることになるだろう。

ル・コルビュジエ

手を意識していたコルビュジエ

コルビュジエは手をすごく意識していて、手のスケッチをずいぶん多く残しています。この右下（次ページのスライド「ル・コルビュジエの手」）は、イボンヌが亡くなった時にイボンヌの手に自分の手を重ねているスケッチですけれども、この他にも彫刻を含め、いろんな手を残しています。

「手は第二の脳」「足は第二の心臓」と言い、よく「手作り」って言うんですけども、私は「手作り」ではなく「手足作り」が相応しいと思っています。「手で考え足で思う」ということを河井寛次郎さんが言ってます。それから最近は「手当」という言葉もだんだんなくなってきたようですが、手の働きで、手が考えることっていうのはずいぶん大切な忘れてならない言葉のような気がします。

手は第二の脳、足は第二の心臓

手足づくり

ホモ・ファール（工作人間）動物、猿との違い

手の働き

手が考える





開いた手

ル・コルビュジエと前川國男が求めた平和への想い

前川さんとコルビュジエを結ぶ共通性は一体何だろうか考えてみると・・・。
前川さんが東大を出て、すぐその足でシベリア鉄道に乗ってコルビュジエのもとへ向かいます。その時に思っていたことはどんなことだったかは、私は想像するしかないわけですが、やっぱりモダニズムとかデモクラシーとか、そういうことが根っこにあったんじゃないだろうか。前川さんが時々引用します渡辺一夫訳のセナン・クルールの言葉があります。「人間は所詮滅びるかもしれない、残されたものは虚無かもしれない。然し抵抗しながら滅びようではないか。そしてそうなるのは正しいことではないか。そしてそうなるのは正しいことではないか。そしてそうなるのは正しいことではないか」という言葉です。

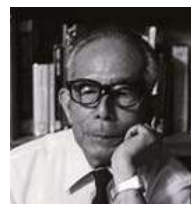
コルビュジエが亡くなるひと月前に、1965年の7月にパリで書かれた遺言とともとれる文章があります。その文章を読むと、最後にこんなことをが書かれています。

「＜開いた手＞ 平和と人々の融和のシンボルは、シャンディガール (Chandigarh) に建てられるはずである。長年の間私の頭にとりついて離れなかったこのシンボル像は、人々の間に和合が可能だということの証言を担うために存在しなければならぬ。我々は戦争のための仕事を一切止めなければならぬ。冷たい戦争が我々に生計手段を与えるというようなことは決してあってはならない。・・・我々は武器を作るよりも、生活の装備を整える道を選ぶのではな

ル・コルビュジエと前川國男を結ぶもの



ル・コルビュジエ



前川 國男

モダニズム と デモクラシー
(近代主義) (民主主義)

前川國男がしばしば引用する渡辺一夫訳のセナン・クルールの言葉

「人間は所詮滅びるかもしれない、残されたものは虚無かもしれない。然し抵抗しながら滅びようではないか。そして そうなるのは正しいことではないか。そして そうなるのは正しいことではないか。そして そうなるのは正しいことではないか」という言葉です。



「開いた手」は平和への希求、
羽ばたく鳩のようにも見える

亡くなる1ヶ月前の1965年7月、
パリで書かれた遺言とともとれる

「人の心ほど伝えられないものはない
—Rien n'est transmissible que la pensée—」

と題された文章が残されている。

＜開いた手＞—平和と人々の融和のシンボル—はシャンディガールに建てられるはずである。長年の間私の頭にとりついて離れなかったこのシンボル像は、人々の間に和合が可能だということの証言を担うために存在しなければならぬ。

我々は戦争のための仕事を一切止めなければならぬ。冷たい戦争が我々に生計手段を与えるというようなことは、決してあってはならない・・・

我々は武器を作るよりも、生活の装備を整える道を選ぶのではなか。

＜開いた手＞は、かつて創造された富を受け入れるために、そして、その受け入れた富を世界中の人々に分配するために、開いているのである。(抜粋)

いか。＜開いた手＞は、かつて創造された富を受け入れるために、そして、その受け入れた富を世界中の人々に分配するために、開いているのである。」それでこういう彫刻を残した。今これは、シャンディガールにある手の彫刻は、平和のシンボルでもあるのです。

ご清聴ありがとうございました。

＜藤原成暁氏によるドローイングの展示風景と文中に掲載したものを除く展示作品＞



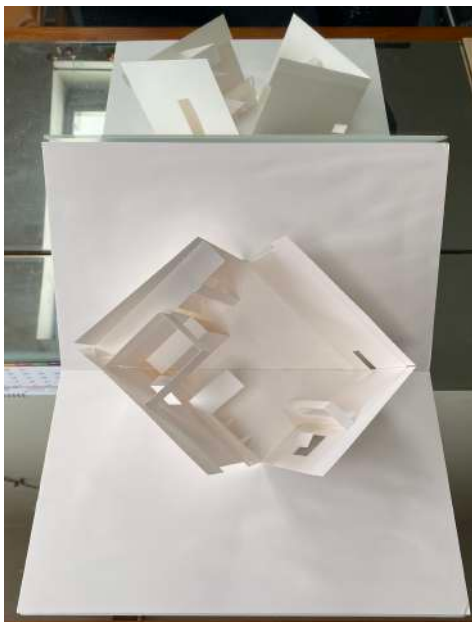
埼玉会館ホワイエ



模型 S:1/10



B6版スケッチノート



折り紙建築



海岸で拾った石に描く

■ ORIGINAL SKETCH NOTE → ORIGINAL DRAWING

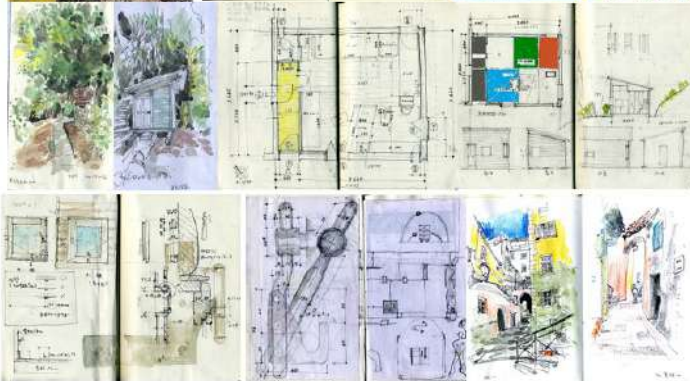
総合図としてのドローイング図面は、休暇小屋の環境を正確に描くことを主眼にしています。しかし、単に眼に映る全てを忠実に再現している訳ではありません。

コンセプトに応じて、デフォルメや加筆、あるいは省略を行っています。また、モノトーンを基調としている理由は、多様な解釈と自由な想像力の誘発を意図しているからに外なりません。

スケッチノートには、初めて現地を訪れた時の感動が詰まっています。その初心の記憶がドローイングするときの活力になって、ル・コルビュジェとの対話の源泉になっている気がします。

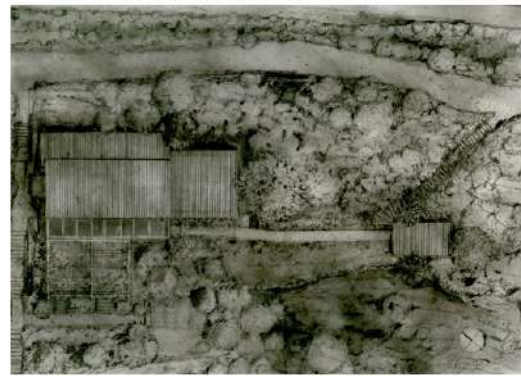


スケッチノート(現地前夜のアイランドから撮影)



No.1

■ ORIGINAL SKETCH NOTE → ORIGINAL DRAWING



SITE PLAN



PLAN



ELEVATION



SECTION

No.2

■ PHOTO → ORIGINAL DRAWING



ここに展示されている18点の原画のうち13点は、本書に掲載されているものですが、今回、改めて5点を加えています。どれも写真から得たインスピレーションと現地調査を基に整理したものです。



No.3

■ PHOTO → ORIGINAL DRAWING

Before (ORIGINAL PHOTO)



photo: Hermin

After (ORIGINAL DRAWING)



- 頭上部と足先を加筆
- 垂直に描く
- 休暇小屋の出入口を明確にする
- 身も心も「家のル・コルビュジェ」を示す格好の一枚



photo: Lucien Bague



- 表イボンを描き入れる
- 窓外がハレーションを起こしているのを、シンボルツリーが見えるように描く
- 右下の床面に光が反射している様子を描き込む
- 空を描いて地中海を暗示させる



photo: Jean Lattès



- 「窓は建築の眼」を強調
- イナゴマに隠された小屋の窓を強調
- 手前に大好きなル・コルビュジェを描き入れる
- アトリエと結ぶ床のコンクリート製のアプローチがイナゴマ(結果)付近で折れ曲がる



photo:

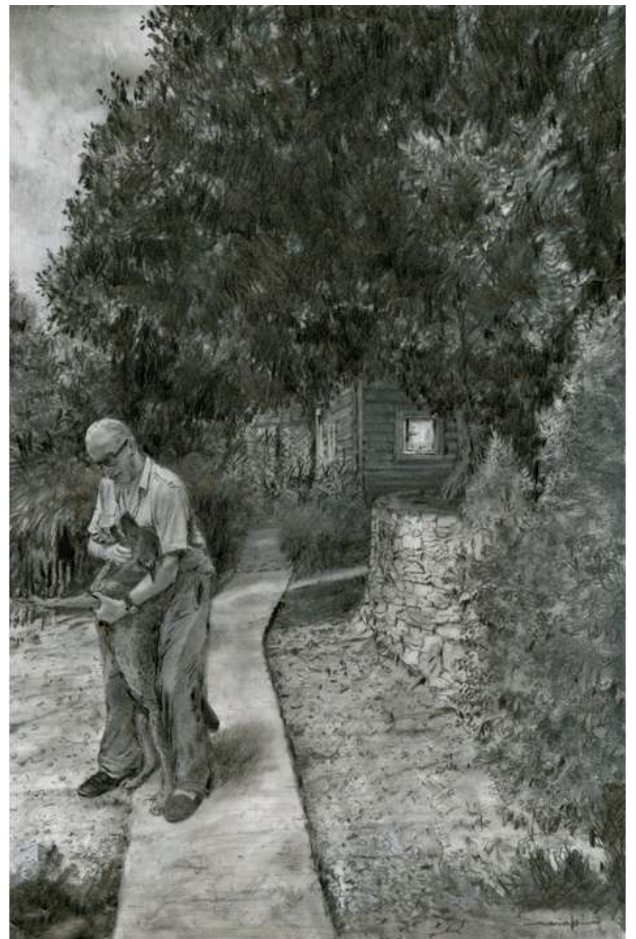


- 鏡の存在を協調するために加筆する(鏡は光を補充し、増幅する装置)
- 厚い壁に当たった窓の影を表現する
- 一筋の光が鏡や机、床などの面に反射し、室内を明るく演出する
- 床の黄色を協調する

No.4



ドローイング展ポスター



アプローチで愛犬と戯れるコルピュジェを合成して描く



小屋とイナゴマメとの間に生まれる屋外空間から地中海を臨む



アプローチを見返す



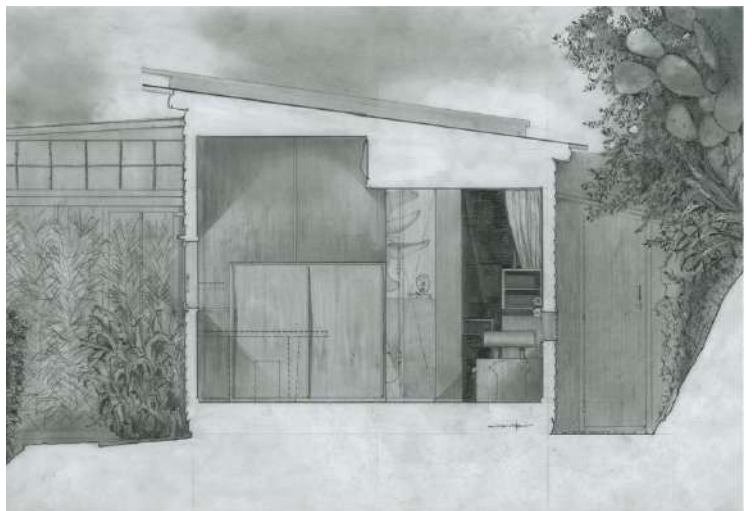
断面図1（ヒトデ軒やイナゴマメ及び背後の崖との関わりが分かる）



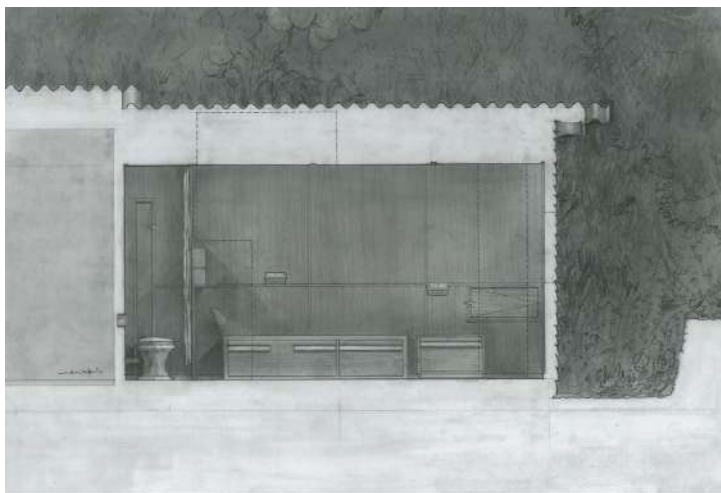
断面図2（斜面地とイナゴマメ、アトリエの関係が読み取れる）



断面図3（地中海と糸杉が見える）



断面図4（居室の天井高の違いとヒトデ軒が見える）



断面図5（天井高2.260での断面）



断面図6（前室の壁画がヒトデ軒への扉のカモフラージュになる）

講演3 「前川國男に引き継がれたル・コルビュジエの思いと埼玉会館」

橋本 功（はしもと いさお）株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長

神奈川県生まれ。日本大学理工学部建築学科卒業後、株式会社前川國男建築設計事務所、同取締役を経て、現在代表取締役所長。弘前市から熊本県まで、使われている全国の前川建築に関する様々な活動に精力的に関わり続けている。

西洋美術館が世界遺産になった選定理由はコルビュジエの近代建築運動への貢献

私の話のタイトルは「前川國男に引き継がれたル・コルビュジエの思いと埼玉会館」です。前半はコルビュジエのことについて、ずいぶん深いお話がありました。それが、どう前川に引き継がれたのか、その辺をメインにお話をしたいと思います。

まず上野にある西洋美術館、これは世界遺産になったわけなんですけども、世界遺産になったその選定理由が実は意外と知られてなくて。それはもちろん、建物について行われたということもあるんですけども、むしろ、コルビュジエの近代建築運動に対する顕著な貢献ということに、評価の軸足が置かれているわけです。

西洋美術館は、世界遺産に登録された17の建物のひとつですけれども、コルビュジエの建物はもっとたくさんあるわけですね。それが国の事情とか、いろいろと大切にしているかどうかという評価で、3回の審査の中で17に絞られてやっと選ばれたという経緯があります。

例えば、インドのチャンディガールは、初めは候補に挙がってたんですけども、インド政府が大事にしないということでそれを外して、フランス政府がまた申し込んで、それで通ったという話があります。

そもそも、近代建築の顕著な運動って、一体何だろうか。このことがあんまり知られておらず、また、このことについて日本の建築界ではちょっとした混乱が生じていたわけです。今日はこの近代建築運動とは何かということ、コルビュジエと前川が育った日本の近代建築の間に何があったのか、どういう混乱が生じたのか、これを今回のテーマであります「引き継がれた思い」を語るバックグラウンドとして、その違いというものを明確に理解した上で、前川が建築の師匠であるコルビュジエに対して、どういう評価をし、どう影響され、何を引き継いだのか、こうしたことをきちっと見定めていきたい、ひも解いていきたいと思います。

五感に触れる建築

～前川國男に引き継がれたル・コルビュジエの思いと埼玉会館～



産業革命とともに人間を中心に考える社会へ

「近代」っていうのは、18世紀から19世紀後半、イギリスで起きた産業革命以降の時代を言います。産業革命によって、今まで、人力、人の力によってものを動かしていたものが動力に変わる、あるいは道具から機械へ変わる。こういう生産技術の大変革にともなって、世の中がガラッと変わってきた。その社会構造が変わる中で、新しく出てきた資産階級、労働階級いわゆる市民層、こういうものが現れ意識が高まって、そして人間を中心に社会を考えていこうと。こういう動きを近代主義と言います。

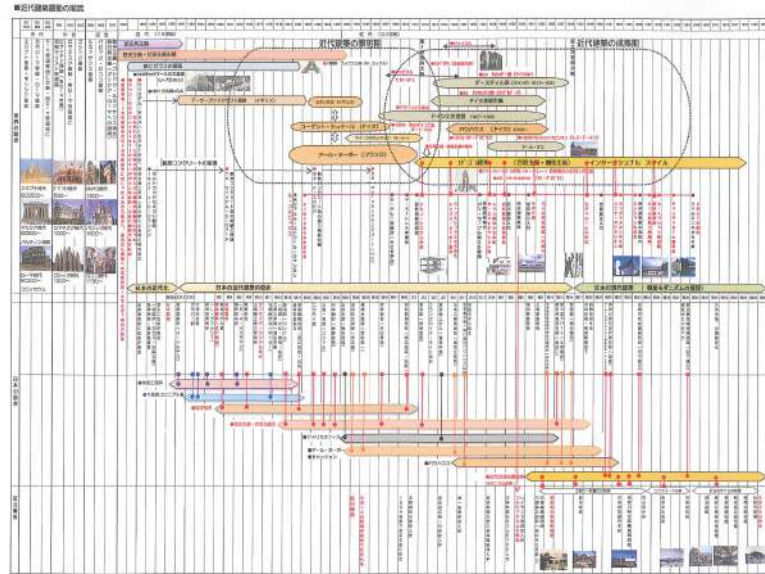
この中で現れたいろいろな近代主義に基づく流れ、これは例えば、皆さんよくご存じの絵画の世界で例えてみますと、それまではどちらかというと宗教絵画に見られるように、宗教をメインにしたテーマが絵として表現されたわけなんですけども、人間の印象、あるいは感性、そういうものを表現として使う、いわゆるモンドリアンとかピカソとかセザンヌ、こういう方たちが現れて近代絵画というものが現れたわけですね。またフェルナン・レジェなんかのキュビズム。こういうのは全部、コルビュジエにも深く影響を与えているわけです。

建築の分野で言うと、先ほど示したイギリスの産業革命以前、いわゆるエジプトあるいはギリシャ・ローマの古代の建築の時代から、その次、ビザンチンとかロマネスクあるいはゴシックの中世建築という時代があり、次にはルネッサンス、バロック、ロココ、さらにはこうした時代の様式を回顧した古典様式、こういうものが現れた近世という建築の時代があり、その後に現れたのが「近代」です。

組積造の重い建築から新しい材料により可能となった軽い建築の時代へ

この「近代」の特徴というのは、それ以前の石やレンガを積んだ組積の構造、重い建築から、近代における産業革命の中で現れた鉄あるいは鉄筋コンクリート造という新しい理論が生まれて、柱を立てて床をつくって壁をつくるという、いわゆる軸組工法、日本では昔から木組でつくっている軸組工法が現れたことによって軽い建築に変わったことです。そしてこういう流れの中で、いわゆる人間のスケール感とか、あるいはもののスケール、コルビュジエというところのモデュールとか黄金比とかそういうものを使って、美しいあるいは人間にとって合理的な建築をつくろうという考え方が近代合理主義という形で、コルビュジエに代表されるような建築に発展していったという経緯があるわけです。

具体的にはこの表にありますように、イギリスの中で、工芸と美術、あるいは工芸と手仕事による作業を結びつけようとしたアーツ・アンド・クラフツ運動がまず始まります。



この運動を主導したのが、ウィリアム・モリスという方で、この人は、素材と工法とデザインを統一するという考えで取り組みます。ところが、このモリスの先生であるジョン・ラスキンの教えに、「デザインは材料・工法に誠実でなければならない」というのがあるわけです。これは実はゴシック建築を評価した言葉なんですね。ゴシックは組積造で、レンガでつくります。ですから、無理なデザインはできない。ジョン・ラスキンはこのゴシック建築は素晴らしいと。それはなぜか。いわゆる素材と工法によって生まれたデザイン、誠実であるデザインだから素晴らしいと言ってるんですが、図らずもこの「デザインは材料・工法に誠実でなければならない」という言葉が近代建築の原理となって、ウィリアム・モリスが「素材と工法とデザインを統一する」という運動を行ったんです。

近代建築は市民の建築、日本ではモダニズム建築に

一方、それまでは組積構造でつくられた威厳のある宮殿、教会などがメインにつくられておりましたので、この近代建築運動が市民層に伝わったことによって、宮殿をつくったり教会をつくったりすることよりも、工場をつくったり住宅をつくったり、市民会館あるいは人々が集まる公会堂をつくったりすることが多くなりました。それがゆえに、近代建築は市民の建築、あるいは人間の建築というような言われ方もしております。

ところが、こうしたヨーロッパの近代建築運動に対して、日本の近代建築というのはどういうものであるか、これがあまり知られていない。日本の近代建築の走りというのは、実は鎖国政策が終わった1859年。いわゆる開国が始まった近代化政策で日本の産業を近代化するために、例えば江川太郎左衛門のように溶鉱炉をつくったりとか、あるいは造船所をつくったりとか、軍事産業のための工場をつくるというのを行ったことが日本の近代建築の始まりなんです。当時は日本ではそういう技術がありませんので、フランスとかイタリア、ヨーロッパの建築技術者を日本に呼んで、その人たちの指導で行われたのが主に、例えば函館や長崎の造船所とか港とか、そういう街だったんですね。

特に1877年、東京大学の前身である工部大学校の建築教育というものを始めるにあたって、様式主義を学んだイギリスの建築家、ジョサイア・コンドルさんを招いて日本の建築教育が始まったわけです。ですからヨーロッパの近代建築が否定した様式主義を手本として始まったというのが日本の近代建築なんですね。例えば、皆さんご存じの東京駅、これはコンドルさんの弟子である辰野金吾さんがつくったヴィクトリアン・ゴシックとクイーン・アン様式と言われている様式主義なんですけれど、これが近代建築の始まりなんです。さらには、コンドルさん自身がつくった1894年の三菱一号館。これは改修されて、今も残っております。さらにはコンドルさんの弟子である片山東熊さんの1909年、赤坂離宮、四谷のところにある迎賓館。これもすべからく日本の近代建築なんです。



1894年三菱1号：ジョサイア・コンドル



1909年（明治42）赤坂離宮：バロック様式 片山東熊



1914年（大正3）東京駅 ヴィクトリアン・ゴシック様式＋クイーン・アン様式：辰野金吾

ですから、ヨーロッパのコルビュジエの世界遺産の近代建築が評価されたときに日本の建築教育で学んでいる人たちは、コルビュジエの西洋美術館と東京駅と同じ近代建築ってどういう意味だって混乱したわけです。それで日本の建築の先生方は、日本の近代建築の中でヨーロッパのコルビュジエ等につながる新しい近代建築を「モダニズム建築」、日本語に訳せば近代建築なんですけど、モダニズム建築と呼ぶようになったわけです。

東京駅は日本の近代建築、それからコルビュジエ風の建築、前川建築をモダニズム建築と、今では呼ぶようになっています。かつては前川國男を称して近代建築のリーダーという言われ方をしたんですが、今では前川國男は日本のモダニズム建築をリードした人として評価されているということになります。

戦争と震災の激動の時代に育まれた前川の関心は必然的にコルビュジエへ

こうした日本の近代建築の歴史に育まれた前川國男が、どうしてコルビュジエに学ぼうとしたのかというところが、そもそもの始まりになります。

前川は1905年、ちょうど日露戦争が終結する4ヶ月前の5月14日に、新潟で生まれております。4歳の時に東京に引っ越しまして、9歳、ちょうど1914年の頃には第一次世界大戦を迎えています。そして、第一次世界大戦が終わった1918年に、日比谷高等学校の前身の東京府立第一中学校に入っています。さらには、1922年に第一高等学校に入学しますが、その翌年23年、前川がちょうど18歳の時に関東大震災を体験するんですね。言い換えれば、前川の少年時代、青年時代というのは、まさに戦争と震災の荒廃、あるいは激動の時代だった。

そういう状況で前川は育ったわけですから、どちらかというと素直ではなかった。高校時代に、例えばロシアのピョートル・クロポトキン、いわゆる無政府主義と言われていた人の自伝をすでに読んでいて、クロポトキンの「国家権力」という言葉に対しては「人間社会」、あるいは「資本の恣意」という言葉に対しては「人間的必要」。こういうふうを考える言葉に共感する精神的土壌を培っていたわけですね。素直ではなかったっていうか、ちょっとひねくれた見方をする精神構造を持っていたと言えると思います。

また、19世紀のイギリスを代表する美術評論家あるいは思想家のジョン・ラスキンの本を、高校時代にすでに読んでいます。これは非常に難しい本です。僕らも今読んで、なかなかわかりにくい本ですけども。このジョン・ラスキンの「建築の七燈」という本を読んで、すごく感銘を受けちゃうんですね。前川は晩年に、「高校の時にジョン・ラスキンの「建築の七燈」、特にその第二章の「真実の燈」を読んだ影響があると思う。そこで、建築家としての僕の今日までの仕事っていうのは詰まるところ、建築の真実とは何かという自問自答の苦闘であった」と言ってるんです。

先ほどこれを聞いた皆さんはラスキンと同じだなと。ラスキンの「デザインは材料と工法に



ジョン・ラスキン（1819～1900）
イギリスを代表する美術評論家・思想家。
ゴシック建築のレンガ積み力学にかなった建築美を評価

「デザインは材料・工法に誠実でなければならない」とする考えが、近代建築運動の原動力となった。

「建築の七燈」：建築に対する基本的な考え方を7つの章で解説
1. 権性の燈 2. 真実の燈 3. 力の燈
4. 美の燈 5. 生命の燈 6. 記憶の燈
7. 服従の燈

誠実でなければならない」という考えが近代建築の運動の始まり、原理と言いましたけれども、高校時代にこういうラスキンの本を読んでいた前川にとっては、近代建築をリードしたコルビュジエのところに思いを馳せるというのは、ある意味では必然の帰結だということと言えるように思います。

コルビュジエの「白の時代」を身をもって体験

1925年に、前川は大学に入ります。これが前川で、隣にいるのが前川と生涯パートナーとなった構造家の横山不学です。それからこの美男子が谷口吉郎。



大学時代は、どちらかというといく多くの学生がヨーロッパの流れを汲むドイツ表現主義とかバウハウス、これは近代建築の流れですけども、それに夢中になっている中、前川はそういうことに一切、目をくれないで独学でフランス語を勉強するんです。そして当時走り始めていた頃のコルビュジエの本を手に入れたり、あるいはコルビュジエの作品の雑誌なんかを取り寄せて見て、感銘を受ける。特にコルビュジエの「今日の装飾芸術」という本に共感して、「あなたの下で学びたい」という手紙をコル

ビュジエに出すんです。それで、コルビュジエから「いいですよ」という話をもらって行くわけなんです。

実はこの「今日の装飾芸術」というのは、1920年にコルビュジエがいよいよ建築を始めるにあたって、ヨーロッパを一周して「これからの新しい建築はこうあるべきだ」ということをレスプリ・ヌーヴォー、「新しい精神」という本に連載したものをまとめたものですけど、その中に書かれていた「告白」という文章があるんですね。それはまさにコルビュジエの青年時代の、各国遍歴に基づく建築の探求の決意表明だったと言えると思います。前川は1930年にコルビュジエのもとから日本に帰国したときに、実は「今日の装飾芸術」を翻訳しておりまして、1966年には復刻版ができておりますが、この中で「私をパリの彼の下へ走らせたのは、実はこの今日の「装飾芸術」の最終章、告白であったと言っていいかもしれない。」ということをおっしゃいます。さらに、当時を振り返りまして前川は、「彼の著作は建築の設計等ではどういうふうにして取り組んでいいかわからない五里霧中であつた中に、学生の私にとっては文字どおり、暗闇の灯りであつた」と、コルビュジエの著作について感銘を受けております。



コルビュジエから入門のOKをもらった前川は、1928年3月31日の卒業式の夜に、神戸から大連に回りましてハルビン、長春からシベリア鉄道に乗って1週間ほどでパリに向かい、4月17日にパリに着いてます。そして18日、翌日にコルビュジエの事務所の門を叩いて入門を果たします。そこはセーブル街35番地というモンパルナスに程近い、僧院を改装したコルビュジエのアトリエで、ちょうど回廊が中庭を挟んであるんですけど。

前川が在籍した1928年から1930年、この頃を年表で見えますと、ちょうどコルビュジエの「白の時代」のサヴォワ邸、この現場をやった時代ですね。それから入所して2カ月後の6月26日には、ヨーロッパの近代建築家が集まり、第1回近代建築国際会議CIAM（シム）が行われて、さらには翌年1929年、ドイツのフランクフルトで開かれた第2回近代建築国際会議に、早くもコルビュジエの代理として前川が担当した最小限住宅という図面を持って出席しているんですね。コルビュジエの財団に、前川がドローイングした図面が残っています。こういうものを持って、前川は近代建築を身をもって体験しました。

テクニカル・アプローチにいたる前川の思い

そしてちょうど2年間勉強した後1930年4月に帰国した前川は、チェコ生まれのアメリカ人アントニン・レーモンドという人の事務所に入り、5年後の1935年に独立して前川國男建築設計事務所というのを開いております。

前川は独立後、コルビュジエから学んだ近代建築を日本に定着させようということ而努力するんですけども、鉄筋や鉄骨、あるいはそういうコンクリート技術等について日本の技術がまだまだ未熟であるということを感じまして、そのためには、日本における建築技術、デザインじゃなくて技術の習得、向上が不可欠だというふうに思い至るわけです。

この頃の前川は、1951年の「下関市庁舎競技設計に関連して」という項目で次のように言っております。「日本における近代建築の第1段階は分離派のひとびと（1920年）の活動によってはじまった。それは折衷主義建築に対する反抗の戦いであった。第2段階は、日本の建築を支える技術的基礎の向上である。それで第3段階では、この第2段階の克



■近代建築の5原則（新しい建築の5つの要点）

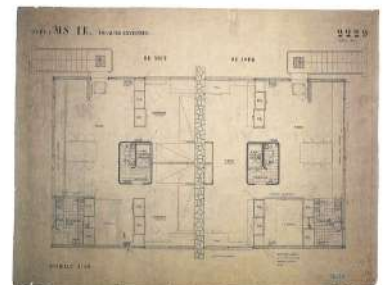
1. ピロティ：建物を持ち上げて地上部分にできる空間。
2. 屋上庭園：勾配屋根でなく、水平な屋根にして出来る、庭園やテラスの場
3. 自由な平面：柱で建物を支持し、空間を仕切る壁を自由に設け自由な室をつくる
4. 横長の窓（水平連続窓）：柱や壁に邪魔されず広く窓を開ける。
5. 自由な正面（ファサード）：柱で建物を支持して、外壁を自由にデザインする。



③
ル・コルビュジエ
最小限住宅（ル・シュール住宅）
1929年
Le Corbusier
Maison Minimum (Maisons Loucheur)
1929

パリ近郊の住宅不足を解決するためのル・シュール法は5年間に6万戸の住宅を建設することを目標としていた。これは第一次世界大戦後の住居復興の重要会合であり、教育制度採用、新式構造など住宅生産の工業化が求められていた。「パサックの集合住宅」建設中の工業化構造に対する地元建設労働者の抵抗を反響し、ル・コルビュジエは共同建築（ユール・ド・ワイアン）に転換を採用するが、それ以外は全て工業化部品により組み立てられている。後川はアトリエに在籍中、継続してこのプロジェクトに係った。「最小限住宅」をテーマに開催された第2回CIAM会議（フランクフルト）において、ル・コルビュジエの代理で出席し、この住宅案を発表した。〔Y.Y.〕

Mayakawa worked in this project for the development of the Maison Minimum (Minimum Dwelling) at Corbusier's atelier. He attended the second CIAM in Frankfurt to present the concept on behalf of Le Corbusier.



④ 平面図詳細 Detail of floor plan
m1 模型、縮尺 1/35 Model, scale 1/35

服、技術諸問題を通してのデザインに努力をしなければ、日本の近代建築はいつまでもごまかしつづけるだけで「ほんもの」になることができない。そういう技術的諸問題への真正面なぶつかり、そのぶつかりのただ中でデザインすることが今日私たちに課せられた使命である。」

当時の近代建築は、木造で近代建築もどきをつくったりとか、そういうことも多かったんですね。前川は、「そうではない。ほんものの近代建築をつくるためには、コンクリート技術とか近代鉄骨技術、こういうものをきちっと学ばなければダメだ」ということを言っているわけです。

■「日本新建築の課題」〈国際建築〉1953年1月号

単なる造形的興味からする絵空事でない建築の、技術的な経済的な前提からの形の追求を今身につけなかったならば、日本の新建築は永久にひとつのファッションに終始せねばならないであろう。

■「れんが」〈日本れんが協会発行〉1981年第2号

建築はファッションではない。建物のディテールを考えることによって表面の形がでてこないといけない。コンクリート建築にしろ、打込みタイルにしても、それらしいファサードがでてこなければいけない。まず素材に対する基本的なテクニカル・アプローチを身につけた上で、その素材を縦横に駆使してこそ建築は自由が獲得できる。技術の進歩とは、そうした自由領域の拡大であると思っている。

ならない。コンクリート建築にしろ、打込みタイルにしろ、それらしいファサードができてこなければならない。まず素材に対する基本的なテクニカル・アプローチを身につけた上で、その素材を縦横に駆使してこそ、建築は自由が獲得できる。技術の進歩とは、そうした自由領域の拡大であると思っている。」と言っております。

前川のこうした考えは、テクニカル・アプローチと呼ばれまして、前川の建築思想あるいは建築の手法を評するキーワードとなっております。この姿勢は、まさにラスキンなんですね。前川はコルビュジエのもとに行って日本の中で近代建築をやろうとしたけど、結局は、「いわゆる材料とか工法をよく知って、それを駆使した上でデザインをしなければ『ほんもの』にならない」というラスキンの教え、こういうものの流れを身近に感じて帰ってきたわけです。そして日本におけるモダニズム建築の道筋として、コルビュジエからこうした姿勢、覚悟を受け止めた前川の決意表明が、このテクニカル・アプローチという手法・思想であったということができるとは思いませんか。

■「感想—下関市庁舎競技設計に関連して」〈建築雑誌〉1951年5月号

日本における近代建築の第1段階は分離派のひとびと（1920年）の活動によってはじまった。それは折衷主義建築に対する反抗の闘いであった。

第2段階は、日本の建築を支える技術的基礎の向上。

第3段階は、この第2段階の克服、つまり技術諸問題を通してのデザインに努力しなければならない。これをしない限り、いつまで経っても日本の近代建築はごまかしをつづけるだけで、「ほんもの」になるときがないであろう。

技術的諸問題への真正面なぶつかり、そうしたぶつかりのただ中でデザインすることが今日私たちに課せられた使命だと思われる。

さらには、1953年「日本新建築の課題」というテーマでは、こういうことを言っています。

「単なる造形的興味からする絵空事ではない建築の、技術的な経済的な前提からの形の追求を今身につけなければ、日本の新建築」、近代建築ですね。これは「永久にひとつのファッションに終始せねばならないだろう」と。

さらには晩年になるんですけども、1981年には、「建築はファッションではない」と言っているんです。「建築のディテール」、建築とか材料とかそういうものの納まり、「ディテールを考えることによって表面の形が出てこなければ

「結局、人間のためには何も建設しなかった」というコルビュジエの思いを継承した前川

ところで、その前川はコルビュジエに対してどう思っていたのか。「うえの」という「上野のれん会」の雑誌なんですけども、コルビュジエのことで次のように書かれています。「20世紀になって、19世紀的な折衷様式に反旗をひるがえして、近代建築もまたその新しい建築の構造技術にふさわしい独自の表現をもつべきだ」という新しい建築運動が起こった。

コルビュジエは、こうした雰囲気の中で建築家として育って、・・・独自の新建築精神を中核として、近代建築運動の旗頭として、当時フランスを中心に頑迷なアカデミズムと闘っていました。」「彼は現代の機械文明に心からの信頼感を持っていた。そしてそれを生んだ近代の合理精神に深い親近感を懐いていた。そしてこれがすべての人間生活を、健康な緑につつまれた太陽にめぐまれた幸福なものに築き上げるものという幸福な期待を持っていた。」

コルビュジエは、そういう期待を持っていた。したがって、モデュロールっていうのも、これは単なる寸法ではない。人間社会において人間が自然の中の一部であるように、自然の中の美しさを形取る黄金比例というものが、人間の寸法の比例によって、みんなが豊かになれるような寸法の比例があるはずだという考えによって、モデュロールっていうものができている。住宅が住むための機械であるという考えも、機械というものに総括的な人間の役に立つ素晴らしいものという考えがあったので、住宅というのはその人間生活を良くするための機械としてあり得るという考えを持っていたわけです。

「しかし」、前川は言うわけです。「彼の期待はやぶれた。そしてコルビュジエは述懐する。『20世紀は結局、金のために建設したけども、人間のためには何も建設しなかった。』と。」コルビュジエ自身は言ってるんです。暗い話ではあるんですけども、コルビュジエにはそういう思いもあったということなんですね。

機械文明が進むほど、真の文明生活が困難になるとは何事であるかって、前川は思うわけです。「一体どうしたのか。コルビュジエはなぜ、こうした人間を愛するがゆえに、人間生活を愛するために苦勞したことが、なんでそういう人間のために何もしなかったという言葉を生まざるを得なかったのか。こういうことに、なんで苦しんでいたんだろうか」ということを問うわけです。前川は、人間のために闘っていくとしたコルビュジエの思いを、今度は自分の思いとして受け止めていたということが出来ます。



コルビュジェの作風の変遷を辿るように前川も模索し続けた

さらには戦後、近代建築が近代化の名のもとに、市場経済の中で近代化がものすごく安っぽい状態の市場経済に翻弄されていく状態を見て、前川は、合理主義の行く末に危機感を感じるわけです。そして、この1984年の原稿では次のように言っています。「コルビュジェは近代建築というものはラショナルイズムの建築だ。合理主義の建築だと言ったけど、ぼくはそのラショナルイズムの、合理主義の建築というのは、日本ではやせた建築になっていく。やせた古いさらばえた建築を近代建築で合理化、正当化するのはまずいと思って、そのころやたらと大きな屋根のある建築を設計した。」って言うております。



1961 東京文化会館



1966 埼玉会館
竣工時の写真

屋根のある大きな建築とは何か。皆さんご存じの通り、1961年の東京文化会館、あるいはその前の福島県教育会館とか世田谷の区民会館。前川の、近代建築の軽い建築からこういう重い建築、ブルータルな構造の建築、コンクリートの打放しの建築に変わっていく時期なんです。さらにその後、1970年代に近づくにつれ、コンクリートが公害問題になる酸性雨とか亜硫酸ガスで汚れて、コンクリートの寿命が持たないという時代を迎え、前川はタイルを外壁に打ち込む打ち込みタイルという時代が変わっていく。1966年、埼玉会館がそうした流れに

あるわけです。

こうした流れをちょっと振り返ってみると、先ほど藤原先生の話にもあったように、コルビュジェのサヴォワ邸に見る「白の時代」とその後、ロンシャン教会とかラ・トゥーレットの修道院とか、コルビュジェのひとつの流れ方と、前川はすごく似ていると感じます。これはあくまで結果論なんでしょうけど、コルビュジェと前川の作品事例の年表を見ると、まさにコルビュジェを追っかけるように前後して、前川の作風も変わっていくという姿がそこに読み取ることができます。

さらに1937年に、東京大学の「木葉」っていう会報なんですけど、前川はこう言ってます。「お前はコルビュジェの弟子ではないか、なぜコルビュジェみたいな家を建てぬかと詰問されることがある。光栄な話である。しかし私はコルビュジェの事務所で二年間そうした過ちを仕出かさないように訓えられてきた。」要するに、コルビュジェのそのままの真似をしないということをコルビュジェから教わったと言ってるわけです。

ここで、建築の近代化を目指した前川がたどった道筋というものは、いくつかの変遷、軽量化の建築、重いコンクリートの建築、打ち込みタイルの建築と変遷はあるけれども、西欧的な近代合理主義の建築と決別して、日本の独自の風土、それから人間の関わり、生活環境との関わり、こうしたものを意識した日本での建築の近代化を創り出そうとして模

●「建築における《真実・フィクション・永遠性・様式・方法論》をめぐって」

《新建築》1984年1月号

・結局ぼくは、合理主義の建築というものの限界を見たような気がして、建築というものは、たとえば経済的な合理性ばかり追求してもどうにもならないんだというようなことを身につまされて知ったわけだ。（中略）
コルビュジェは近代建築というものはラショナルイズム（合理主義）の建築だとはっきりと書いていたけれど、ぼくはそのラショナルイズムの建築というのはそのままでは日本ではやせた建築になっていくと思った。
やせた、古いさらばえた建築を近代建築で合理化、正当化するのはまずいと思って、そのころやたらと大きな屋根のある建築を設計した。

索した道筋であり、この道筋の歩みこそ、実はコルビュジエから学んだ、継承した大きな財産であると思えることができます。

コルビュジエの思いが継承されている埼玉会館のエスプラナード

本日のメインテーマは「五感に触れる建築」ということですが、視覚とか聴覚、あるいは嗅覚、触覚、味覚ってというのはちょっと食べてみるわけにいかないんですけど、「味のある建築」という言い方をすることはあるのかもしれませんが、これを読み解く七つのデザイン・キーワード、それから神奈川県立音楽堂と東京文化会館と埼玉会館の見どころをまとめたものがここにあります。時代を超えて居心地の良い建築が、そこに共通してあるということです。

最後に、コルビュジエから影響を受けたと言われている埼玉会館の空間についてちょっとお話しします。埼玉会館のたまたまの特徴には、エスプラナードと呼ばれる屋上広場があります。ちょうどこのホワイエの上ですね。このエスプラナードっていうのは、スペイン語を語源として、いわゆる散策路とか散策広場っていう言い方をしますが、フランス語の空間、エスパースという言葉と散策路、プロムナードを合わせて創った「エス・プラナード」という造語だという説もあります。

前川のエスプラナードというのは、会議棟とか大ホール、小ホール、前は図書館があったわけですが、それらに囲まれながら開いている広場、そして都市的広場であり、周囲の道とつながり、建築へのアプローチでもあるという、そういう捉え方ができます。前川は実は、このエスプラナード、囲まれた空間をコルビュジエからヒントをもらっていたわけです。それは、1978年の「続・現代建築の再構築」に、前川の次のような言葉があります。「コルビュジエと偶然、バスで乗り合っ、ルーブルの庭を横切っている時、コルビュジエがこのスペースがとてもいい。物があるんだけど感じさせない。

しかも包み込まれた感じがする。しきりに僕にそういうふう言うんだ。この言葉が非常に頭に残っていて、埼玉会館を頼まれた時に、何かで囲まれた空間ができたと思って」やったと言ってるんですね。まさにこの埼玉会館のエスプラナードは、このコルビュジエの言葉からヒントを得ている。また同じ言葉が、次の「一建築家の信条」の文中にもあり、別な場所を言ってるんです。本当はルーブルなのかヴェルサイユなのかどっちなのか分かりませんが。

埼玉会館から始まった囲まれながら空間をつくっている広がりというのは、その後1971年の埼玉県立歴史と民俗の博物館にもあって、エスプラナードという言葉は埼玉会





館、1975年の東京都美術館、それから大濠公園に向かって開いている1979年の福岡市美術館の三つにしか使ってませんが、こういうものが前川のその後の空間を構成する大きな重要な要素になっている。

そういう意味で前川の建築空間の中には、形としても、生き様も含めて、色合いも含めて、見どころも含めて、キーワードも含めて、コルビュジエから影響を受けている。しかし、それをそのままのものではなくて、前川自身なりに咀嚼した言葉として作り込んでいる。そういうものが前川がコルビュジエから継承した大きな財産で、埼玉会館にも、その継承された思いがずいぶんあちこちに詰まっている。

皆さんは新たに埼玉会館を見ながら、また全国に今50か所ぐらい、前川の建築が残っておりますけれども、それらを見ながら、「あ、ここにもそういうのがあるね。ここも見どころだね。」っていろいろ探して見つけて、前川建築を長く愛していただければいいと思います。

どうもありがとうございました。



トーク：「五感に触れる建築」

八代 克彦 藤原 成暁 橋本 功 青山 恭之

五感に触れる建築
Oct.9 2023

青山 恭之



1 段目の階段に見る気遣いの意匠

青山（コメンテーター、進行）：それでは、ちょっと僕の方から補足的な話をしてから、皆さんの意見を交えて進めてみたいと思います。

これは今日の配布資料の表紙にも使わせていただいた僕のスケッチで、今から10年ぐらい前のものなんですけれども、ものづくり大学の学生たちを、僕と藤原先生で授業中に案内して、それでたまたま、この時に黒っぽいメガネをかけていた藤原先生が窓に見えたので描いてしまったものです。今日のこのフォーラムのチラシには、藤原先生のドローイングで丸メガネをかけたコルビュジエが小屋から覗いてるスケッチがありますよね。藤原先生はコルビュジエを師と仰いでるように、僕は藤原先生を師と仰いでるような感じです。

それで、この絵がちょっと面白いのは、学生たちの靴がああ玄関の入り口のところに溢れてるんですよね。今の学生は靴をちゃんと揃えて上がらなくて、脱ぎっぱなしでいくんですけれども。ここから今日の話に入っていこうと思います。

この小屋は実際、20cmぐらいはGL（グラウンド・レベル）から上がってるらしいんです。この設計は330mmだったかな、1FL（フロア・レベル）。それで、途中に一段つけてるんですけれども、そこに立ってるのは藤原先生で、入口の鍵を開けているところなんです。注目してもらいたいのは、この引き戸の手前にある段鼻が、ちゃんとアールがとってあるってことなんですよ。

実はこれ、埼玉会館の西面の搬入口の隣にある扉。これがものづくり大学の休暇小屋とそっくりで、実はもうひとつ、前川國男の自邸にある階段の一番下の段が、やっぱりこのように違っている。

一番最後の段という、階段の空間からフロアに移る、その間のところ、空間と空間のせめぎ合うところをきちっとデザインしてる。そこをきちっと



考えている。それは、ここは五感に関わるんだけど、この段の最後のところで体の重力の掛かり方が変わりますよね。そこを「気をつけよう。ここから階段なんだよ。」逆に言うと「ここで階段が終わるんだよ」っていうことを、本当にさりげなく言ってる。橋本先生もおっしゃったような大きな思想もあるかもしれないけど、この辺りの、こういうちっちゃなところもしっかり前川さんは、コルビュジエから受け継いでるんじゃないかって思ってるんです。

埼玉会館にみる細部のこだわり

あと、ここ、県庁通りに面しているところにある池（今は水がありません）ですが、僕はちっちゃい頃からここを歩いてまして、この段の上でよく金魚を見てました。この段があるかないかで全然違うんですよね。子供にとっては、そこがちょっと高いことで中の金魚がよく見えたり。こういう場所が散りばめられている。それがやっぱり、埼玉会館のすごくいいところだと思います。

この段にしても、エスプラナードに上がるところに、手前にこのような段があるんですよね。それで彫刻家だったら、やっぱりここに作品を飾りたいわけです。この前（2019年）のエスプラナード展の時も、ここに作品を置いた作家がいましたけど。

ここを上がって、このエスプラナードに出るんです。これは僕が学生の頃の写真なんですけど、このエスプラナードのレベルに出て、そこから階段を上がって3階レベルのところに図書館の入り口があるんですよね。こんな公共建築はあり得ないっていうのもあるかもしれないけど、これがまた良かったなっていう気がしてます。ここは通りのレベルで、そこからさらに上がる。結局、県立図書館は壊されちゃうので、階段の右側は全部スカッとなくなりました。



その図書館とエスプラナードとの間にあるその階段を裏から見たとこなんですけども、ここがまたちょっと凝ってまして。竹が何本か生えていて、入り口の上のスラブを細い柱4本で支えているんです。これはもう今は見れないんですけども、この下に入って上をよく見ると、こういうアールがとってある。1本柱でやれば済むんだろけれども太い柱になっちゃうんで、それを4本に分けて上にアールを入れている。この目に付かないようなところもきちっとデザインされて、素晴らしいなと思ったことがあります。これは建設中の写真なんですけども、このところにちゃんと型枠のアールをとっている。苦労してると思うんです。

こういう事って、普通の建築では考えられないんです。建築の設計って、ひとつ建物をつくったら、敷地の向こうは関係ないんですけども、ここはたまたま埼玉県同士の建物なので、こういうアクロバットっていうか、面白いことが生じている。隣との関係をすごく大事にしている。

次の空間とのつながりや環境を大切にする 前川イズムは現代にこそ必要

これ（左下図）は県立図書館の解体直後の僕のスケッチで、手前は更地になってるんですけども、注目してほしいのがここ。ここから階段が上に向かってあったんですよ。今はバスッと切っちゃって断面だけが残っている。次（右下図）は橋本さんの絵なんですけど、ここに階段が造られている。すごく大事なことで、エスプラナードが、違う空間にまたつながったんですよ。この絵は橋本さんが県の文化振興課の方に、デザインを依頼されたんじゃなくて、どんなことを考えてますか、ちょっとポンチ絵でも書いてくれませんかと言われて描いた絵だっていうことを伺ったんですけど、ここに橋本さんの思いがすごく込められている。それは橋本さんにちゃんと前川が、周りの空間との間をきちっとしなさいよって。前川さんはもういないわけですけども、それは前川事務所に引き継がれてるんだなと思いました。この階段が「ある」と「ない」では、全然違うんで、子どもたち



はよくここで遊んでいて、この階段を行ったり来たりしてます。

こういう次の空間とつながることっていうのを、今の都市の建築家はあまりしなくなっちゃって、すごく残念だなって思います。これが完成したもので、橋本さんのスケッチとほぼ同じようにできてる。少し平場が広く、真ん中のひょっこりひょうたん島みたいなのは二つの島になっ

ちゃってましたけど、こんな風に実現しています。

埼玉会館に対する前川の言葉の中に、「浦和の街の市民にとって「なつかしい」ひとつのオアシスにも似た「ランデブー」をつくり出したいと苦慮しました。」とあります。街との間になんかこう、手を結び合おうっていう、そういうことが見えるんです。

さらにすごいことを言っていて、「人間がいつか破滅しないために、破壊しただけの自然をどこかで補償していくというモラルについて、お互いに深く考える時期にきているように思います。」というのを、1966年の時点で言ってるんですね。今、僕らは本当に大変な地球環境の変化に見舞われていて、戦争なんてやってるところじゃないんだけど、もう前川はこんな時期に、壊した自然は戻すんだっていうぐらいのモラルを持たないとダメだよっていうことを、警告を鳴らしているんです。

コルビュジエから前川に行って今日の課題につながるようなところを、ちょっと補足させていただきました。



■埼玉会館に関する言葉

●【設計者の言葉】日刊建設通信 1966年10月23日

・私達はこの埼玉会館で、敷地に不相応に大きい要求をうまく満たすと同時に、浦和の街の市民にとって「なつかしい」ひとつのオアシスにも似た

「ランデブー」をつくり出したいと苦慮しました。人間は文明によって自然を

破壊してゆく必然があるといわれます。そうした人間自身がいつか破滅しないために、破壊しただけの自然をどこかで補償してゆくといったモラルについて、

お互いに深く考える時期にきているように思います。この会館も及ばずながら

そうした考えを、たえず念頭において設計したつもりであります。その成否は

今後の審判と運営に俟つ次第であります。」

「階段は必要なもの」では

八代：前川建築は階段がふんだんにあって、昨今は誰でも通れるバリアフリーという言葉に反しているようですが、階段は、実は必要なんじゃないかと。階段というのがあることによって、そこで「よっこらしょ」ということが起こる。

私はたまたま清家清先生に大変お世話になったんですけど、清家先生もご自身の足が不自由になってから、僕らに「階段を設計するときは線1本はやめてほしい、できれば2本か3本。」それ、どういう意味ですか？って言ったら、「年寄り、あの線が1本だと1段で蹴躓くんで大変なんだ。だけど2本か3本あるとワン・ツー・スリーで勢いで登れるし、とてもいいんだ」っていうようなことをおっしゃって、とにかく、階段をつくるということを目の敵にするっていうのはおかしいんじゃないかというようなお話でした。

実際に鳥取県の国宝、三徳山三佛寺投入堂なんかも、行ってびっくりしたんですけども、車椅子の方をご家族が背負って登ってる。あ、本来そういうことなんだよねと。誰でもなんでも車道をつければいいっていうんじゃないかもしれないねっていうのを、先ほど橋本所長のお話聞きながら、思い出した次第です。

エスプラナードと駅を結ぶさくら草通りは街の軸

私は浦和に20年ぐらい住んできたんですが、すごく感動したことがあります。それは建物の中をどんどん通らせてくれたあの須原屋さんをはじめ、銀行の敷地の中も皆さんどんどん通られて、もしかしてこれって、パリのパッサージュじゃないか、建物の敷地の中を通らせてくれるっていうのはすごく大きなことだなあ、浦和らしいなあっていうのを思いました。

私はこの埼玉会館のすぐ真ん前に、17年間住んでました。玄関を開けるとそこに埼玉会館があって、毎日、埼玉会館を見てたんです。それでこの辺をよく歩いてたんですけども、コルソを抜けてさくら草通りを歩いてきて埼玉会館に行き着く。あのさくら草通りが、重要な道だったっていうことを橋本さんに先ほど（控室で）お聞きしたんですが、その辺のところをもう一度……。なぜかという、今ちょうど駅前の西口が再開発されて、昔から僕らみんなが毎日通ってた大切な道がどんどんなくなっている。そういった人が毎日通る道っていうのは、大切だなと思っていて。

橋本：実はさくら草通りって今、書いてあるけども、あれ自身は明治16年ごろから出来ていて、停車場通りっていう言い方をした。その頃はまだ、県庁通りはなかった。そして1982年に、さくら草通りというのは完成しているわけ。

ということは、昔の岡田信一郎さんがやった旧埼玉会館ができたのが1926年だとすると、まだ県庁通りっていうのはなくて、さくら草通りっていうのがまだ出来る前に、停車場通りという姿のある状態の中で埼玉会館というのは建設された。そういう歴史なんですね。

それから、駅前にある建物、ちょうどさくら草通りに抜ける道というのは、コルソっていう名前ですけど、それはイタリア語で「道」という言葉です。ですから、埼玉会館のエスプラナードというこの屋上の広場というのは、プロムナードであるさくら草通りからコルソを通じて駅につながっているという、浦和の街のひとつの軸を成している。そういう位置で、この埼玉会館と街との環境を見ることができるといことです。

また2015年に、皆さんのお座りの椅子も改修しましたが、ここに選ばれている柄も全部その時に作った柄で、実はさくら草通りのその縁を考えて「さくら草」のモチーフをもとにした柄になっています。ですから、この埼玉会館という建物を見るときに、その街との縁というものを感じながら、このエスプラナードの広がりというものを見ていただくと嬉しいなと思って、お話をしておりました。

青山：とってもよくまとめてくださって、ありがとうございます。会場から二、三方、お話をいただけると嬉しいんですけど。

中心がない緩く閉じられた空間の心地よさ

参加者 1：前川先生の埼玉会館が、私にとって非常に居心地がいいところで、私は浦和に2週間に1回、通院に来てるんですが、2時間ばかり薬局で待つ時に、埼玉会館にお邪魔させていただいてます。

浦和に限らなくて埼玉県内でもどこでもいいんですけれども、橋本所長がおっしゃっていた、ル・コルビュジエが前川さんに、埼玉会館のちょっと囲われているところがいいんだっておっしゃっていた話を聞いてすごい嬉しかったんですけれども、守られる場所を、自分の心が、人間の心が守られる建築がある場所っていうのを探すときに、あるいは判断するときの基準みたいなものを教えていただければと思います。

青山：個人的に言ってしまうと、円形の中心とか、いわゆる閉じられて守られていると安心なくてね。例えば、さいたま芸術劇場の真ん中に丸い口トンダっていう空間があるんですけれども、そこは閉じられていて、さらに円がまん丸ですごく幾何学的なので落ち着かないですよ。シンボリックではあるけれど、落ち着かない。

埼玉会館のエスプラナードがいいのは、さっき藤原さんがおっしゃられた、真ん中には何もないっていうことと関係していて、大ホール、小ホール、会議棟のどれが中心でもない、イーブンな関係で甲乙つけがたい、そういうヒエラルキーがなく囲まれているような、緩く閉じられているのが、ひとつの条件かなと思うんです。

コルビュジエの黄金比と日本の白銀比

参加者 2：八代先生にお尋ねしたいんですけれども、コルビュジエは当然、黄金比なんですけれども、日本では白銀比というのがございましたよね。コルビュジエはこういった日本のモジュールは知っておられたんでしょうか。

八代：これは私の推測なんですけれども、やはり白銀比っていうのはスペシャルな長方形ですから、知ってはいたと思いますけれども、やっぱりヨーロッパの建築、パルテノンでもピラミッドでも、フレームとしては黄金比の方が古代から使われて、彼らにとっては馴染みがあるのではないかと思います。それをコルビュジエが彼らにとっての最高のプロポーションと身体とを結びつけたっていう感じで、あえて白銀比を無視したとか、そういう感じではありません。

参加者 2：ありがとうございます。入口のドアで引き戸が使われてるっていうのはかなり珍しいことだと思いますが、この入口は、確かに手前は引き戸なんですけれども、開戸にもなってるんじゃないかと思うんですけれどもいかがでしょうか。

また、この建物は、筋交っていうものが入ってますか。

藤原：これは、手前が引き戸でもう一枚奥が片開の網戸になってまして、二重になってます。扉は引き戸で開けておいて、それで虫とかその他諸々が来ないように網戸にしたので

はないかと思います。この開き戸の開き方も、右開きか左開き、右勝手か左勝手かってことがあると思うんですけど、やっぱりこの反対側の吊元の方が引き戸側になってるんですね。それは、この壁画を汚さないっていうということと、引き戸の引きしろっていうのは、全部入っちゃうと引き出すのが大変なもんですから、どうしても残さなきゃいけないので、その分がちょうど隠れるようになってるっていう、その両方の意味があるんじゃないかと私は思っています。

八代：レプリカの休暇小屋は歪み直して筋交を入れたただけで、最終的には入っていません。この場合は、合板で固めてたということです。

藤原：本物の建物は壁構造になってまして、パネル構造です。ただ、我々は別に中身が見えないところは一番つくりやすい方法で、在来工法でつくりました。本物は壁工法です。

コルビュジエに見てほしかった関守石にみる日本の文化

ひとつだけちょっと付け加えさせていただいてもよろしいですか。

コルビュジエが日本にやってきたときに、どうも坂倉先生がコルビュジエを案内したようです。もちろん先ほど写真にあったとおり、前川事務所にも行ってますが、前川先生は自分の作品をお見せする機会がなかったそうです。坂倉さんはご自分の作品を、鎌倉にある神奈川県立近代美術館を案内した。そこが私は、随分大きな違いがあるなって。やっぱり前川先生らしいなというか、坂倉準三先生らしいなって、おふたりの性格の違いがそこでもよくわかるんですけど。

そして京都も案内します。先ほどの白銀比の話とつながるかどうかわかりませんが。コルビュジエは桂離宮も案内されたけれど、あんまり見向きもしなかった。京都の先斗町がすごく良かったっていうことは言葉で残ってるらしいんですね。

それで、僕はなぜ桂離宮で「関守石」を見せなかったのかなと思った。「関守石」っていうのは、桂離宮に限らず日本の神社仏閣によくあるんですけど、石ころにシュロ縄でくるくると十字に結んで、ここから入っちゃいけませんっていう印で置かれてる。そこで、多分コルビュジエが行けばどこでもオールフリーで、そんな関守石なんて置いとく必要がなかったんだと思いますけど。ここから入っちゃいけませんよっていうのが日本の伝統にあります。飛び越えようと思えば簡単に飛び越えられますし、足でポンと蹴り飛ばせば簡単に蹴飛ばされます。けどもそういう文化というものが日本にはあるんだっていうことを、ぜひ僕はコルビュジエに見てほしかったな。そしたら、桂離宮もいいところあるんじゃないかって言って、ご覧になられたんじゃないかなと実は思っています。

景観を大切にする日本の文化

私は弘前に行った時に、景観を見てびっくりしたことがあります。弘前城は桜の名所で、桜並木がある弘前城の周りにはお堀があり、歩道がありまして車道がありますけれども、ある場所へ行きますと、お堀と歩道の間に手すりがないところがあります。普通は当

たり前のように、歩道と車道の間にガードレールがあります。ところが、そこにはガードレール也没有。電柱も建っていないのです。そういう景観をちゃんと残している。僕は弘前に行った時にその景観を見てびっくりして、なんて弘前市の市民は素晴らしい方たちなんだろうって感動しました。桜のいい時は1週間か2週間か、そんなに長くは続きません。もちろん緑の雨季がいい時もありますし、葉桜もいいかもしれませんが、一年間ずっとそれが続くわけじゃないにも関わらず、その場所を、そういう景観をきちっと残している。

子供が落ちたらどうするの？車が飛び込んできたらどうするの？それは子供がもしも落ちたら、周りのいる人が引っ張り上げりゃいいじゃないかと。まあ落ちてもそんなに大きな怪我をするようなところではない。車だってちょっとゆっくりスピードを緩めて走れば、そんなに大事故にはならないんじゃないかっていう、多分そういう民度の高さが弘前の市民にはあるのではないかなと思って感心したことがありました。

都市の記憶の積み重ねによって育まれるもの

弘前は、なぜ民度が高いのかって考えた時に、都市の記憶ということをよく言いますが、やっぱり戦災にあって大空襲を受けたところ、完全に焼け野原ってところが立ち直るのには、相当傷を負ってますので、復興するのに戻りにくいと思います。例えば、人間ひとりの記憶でも、小学校の時の記憶がもしポツンとなかったら、生きていくのに結構不安だと思います。中学生の時の3年間で全くなかったら、・・・それと同じことが、都市の記憶の中になくなるわけですから、相当、僕は傷が深いと思います。

弘前は震災を受けてないんですね。こちら浦和も、先ほど青山先生に伺ったら、若干は戦災を受けているけれども100%完全に被災してはいないようで、そういうところがやっぱり大きな原因になっているのではなかろうかと思います。勝手な私の推察なんですけれども。

「生活者」としての街づくりをみんなで考える気運が高まれば、人間的な街が・・・

参加者3：「五感に触れる建築」ということで、今風に言えば、人間的な建築を望んでいるという感じがよくわかりました。

街が変わるっていう話もありましたが、例えば、ミッドタウン八重洲、ミッドタウン日比谷、麻布台ヒルズができると、東京はもう本当に東京駅周辺も含めてガラッと変わって、僕は非人間的な街になっているような感じがするんです。ここら辺で言うと、市民会館おおみやがあんまり人間的な感じがしない。それで、今度は市民会館うらわができるので、これはもうぜひ人間的な感じにし、そしてこの埼玉会館が生きるような、道というようなものができるといいなと。

建築と街づくりはどうしても繋がらざるを得ないということで、今の浦和ほかを考えてみると、本当に建物はできるけれど、人間的な街になっているのだろうかと思います。本当に簡素な8畳間の休暇小屋の素晴らしさを今日教えていただきましたが、これからつく

られる、いい意味の建築とはどんなものなのか、街はどんなものか教えていただければと思います。

橋本：難しい質問で答えられません。ただ、いつも私自身も実は考えているのは「街って誰のもの」ってことです。

この間からいろいろ私自身の中で課題となっていた東京海上ビル解体の問題。あそこは三菱地所村なんですね。三菱地所が計画をつくって、三菱地所が全部アピールして、みんなの街って言うだけで。

思えば、我々の住んでいる日本の中で、我々自身が「生活者」としての街づくりっていうものを、どれだけ自分の問題として捉えているんだろうかということがすごく最近怖い。みんなが知らない間に全国に同じ街づくりができて、みんなが知らない間に商業ベースで街ができて、「非常に非人間的」という言い方はちょっと語弊があるのかもしれないけど、商業ビルなんですよ。しかも大規模建築。そこで全部、過ごせる。でもそこに、買い物客としての、「消費者」としての人間の通いはあるけれども、子どもたちを含めて「生活者」としての街づくりの視点っていうのが、どれだけあるんだろうかっていう問題に、いつもぶつかる。それで、いわゆる現在の都市のあり方に失望するわけですね。

でも失望ばかりもしてられない。どれだけ声を上げられるか。建築は今、どんどん壊されていく。名建築が壊されていく中でも、やはりあまりにも僕ら自身が黙ってすぎるんじゃないか、という感覚をすでに持っています。それで、デモしろとかそういう話ではなくて、もっと街づくりについて、もっと一般の市民の「生活者」としての意見として、自分の街を考えると、そういう意見がもっともっとたくさん出ていいんじゃないか。まだまだ、そこまではないけれどその一環として、例えばこの埼玉会館を基準に建物を語っているけれども、街を語る、そして浦和の街を語るっていうふうな、今日もいい機会をつくっていただいた。こういう機会をこれからも何回もつくりながら、みんなで街づくりを考えていくという気運の高まった先に、その答えは出てくるんじゃないかなと思う。

だから、何が答えで、こうすればいいっていうのはわからないけれど、みんなで自分の課題として、自分の住んでる街づくりとして、それぞれのエリアでそういうことをちょっとずつ声を上げていって、勉強会をしながら広げていくっていうことが、やっぱり大事なんじゃないかなっていう思いだけは感じています。僕から答えられるのは、そのぐらいしかできませんが、申し訳ございません。

（会場内拍手）

青山：ありがとうございました。



（2023年10月9日 埼玉会館大ホール）

*本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください。